大和名所圖會

添上郡

一

ル 4
6321
1

我邦の大和乃國者
神武帝のはしめて都をたてさ
せ給ひしより累代々の都となれる
此くに也風俗も繁く規模となりて
我の徳ありて功名をこの世繁榮會

14K
6321
1
2008-328

ふるあまの浦ふかう山のゝ中
雪はをゝく夢野宮漁の火ちら
ちらとゝ人僕よ地震ゆゑ
秋里湘夕ゆゑ若かりて名和古流
板家巻伝流伝ゆゑ
毎つゆとゝまて ひとゝ画よう新と

<2000-220>

おもやうふゝ
一大和国舎名作ゆゑ
女子の目をよろこ
ゝんや実よ
てゝ
元の後正本

法九条 松殿基房
伏業北亭 おこなふ
をこなひ給ふこと
寛政辛亥春

伏原正二位清原宣條卿

佩弟五人

大和名所圖會卷之一

添上郡南都之部目録

大和國號之解　奈良之訳　南都之盤觸　春日野
春日社　中院小社六座　直會殿　幣殿
内院小社二座　手力雄神　飛来天神　岩寺　辛榊　神護寺　彩　青榊　井栗
舞殿　鹿走　林檎庭　御手洗川
一位橋　二位橋　一鳥居　聖の床
遷殿　南門　影向石　如意石
布生橋　酒殿　御供所　俊喜櫻
春日若宮　内院小社　手力雄神　通合神　懸橋　佐良氣　廣瀬　八所祠　外院小社
紀伊祠　弁財天　拝殿　御廊
拝之屋　居石　五箇屋　あひの橋
祝之屋　個馬屋　舟戸屋　造屋　凡之屋　上之屋
波之屋　竹之屋　菊之屋　西之屋　本談義屋　已上
般若屋　内侍房　椿之屋　二大社屋　安居屋

経藏
水屋社
長尾祠
春日山
若宮御旛所
車屋殿
名燈爐
樓本祠
外院小社八座
借香山
宅麦日
高嶽
東大寺大佛殿
大釜
若狭井
鎮守八幡宮
勅封倉 蘭奢待 鴨毛屏風
剱墳
宜寸川
東南院
野守鏡
蝙蝠窟
念佛堂
如月瀧
講堂の蹤 大紅塵
戒壇院
浮宝祠
詫宣池
景清門
良辨杉
法華堂 二月堂
手向山
玄武山 北五所山
文遺化藏
北向荒神
氷室祠
五百立祠
二月堂
二時堂 四月堂
むさゝ塚
空海寺
八幡池 鏡池
真言院
飛火野
飯盛山
剱の澤
牛石
日月般若氷室雀眉蹟
大鳥居
若宮澤
五位橋
神頃森 同山
剱先石
本宮嵩
尾上宮
羽黒山
名銅燈爐
春日參圖
名燈爐
馬出橋
率川
二鳥居
着到殿
みゝゝり川
御祭圖
水屋川
三笠山
二基塔
善趣橋
板戸祠
地獄谷 僧正門
白毫寺
鳴雷神
後彖堂
忠隆金剛童子 佐軍神
椿本 栗辛
風神 海本
椿本 八雷神
内侍門 鹿賀門
高圓山
香山
若草山
鯖翁杖跡

凡例

一域内十五郡に封境小大あり廣大なる一郡二巻に亘て狹小なるは
五郡一巻に縛るあり其郡異に圖卦の上に細書して標しぬ
一圖中に大度の寺院を創り一子有餘業を展るの多し時世の移変に
依て國郡騒擾の時或は荒廢し或は田祿に及ぶものも亦多し於是
圖画に今時の景勝なるを以て由縁に舊記なきを書て新謂
興福寺薬師寺のごとき古蹟なるを画とす其地の風色
一圖畫の間々に人物の大繪あり古歌のこゝろを画とす其地の風色
あるいはさんがるゝ又事實なる画をも兼乃見安らん便に
素日此辨枕ならされ之
一新建の堂舍新建の碑銘の類をも小漏し仍ち雅風流
あるものなるゝんで載せ

邈矣鴻靈地千
年芳州新風
煙留朕景長洲
引駿人

大江資衡 [illegible]

公事根源曰
今の國栖の奏こそ
歌なるらし笛なる吹
るゝこと古称より年の
始にあるらしいと
めでたし
江家次第曰
國栖歌笛於
兼明門外
奏之

彩雲
五日の
つゆ紫の
ころも衣
君なれこそ
ここう
ちく
ちと
左衛門平朝臣

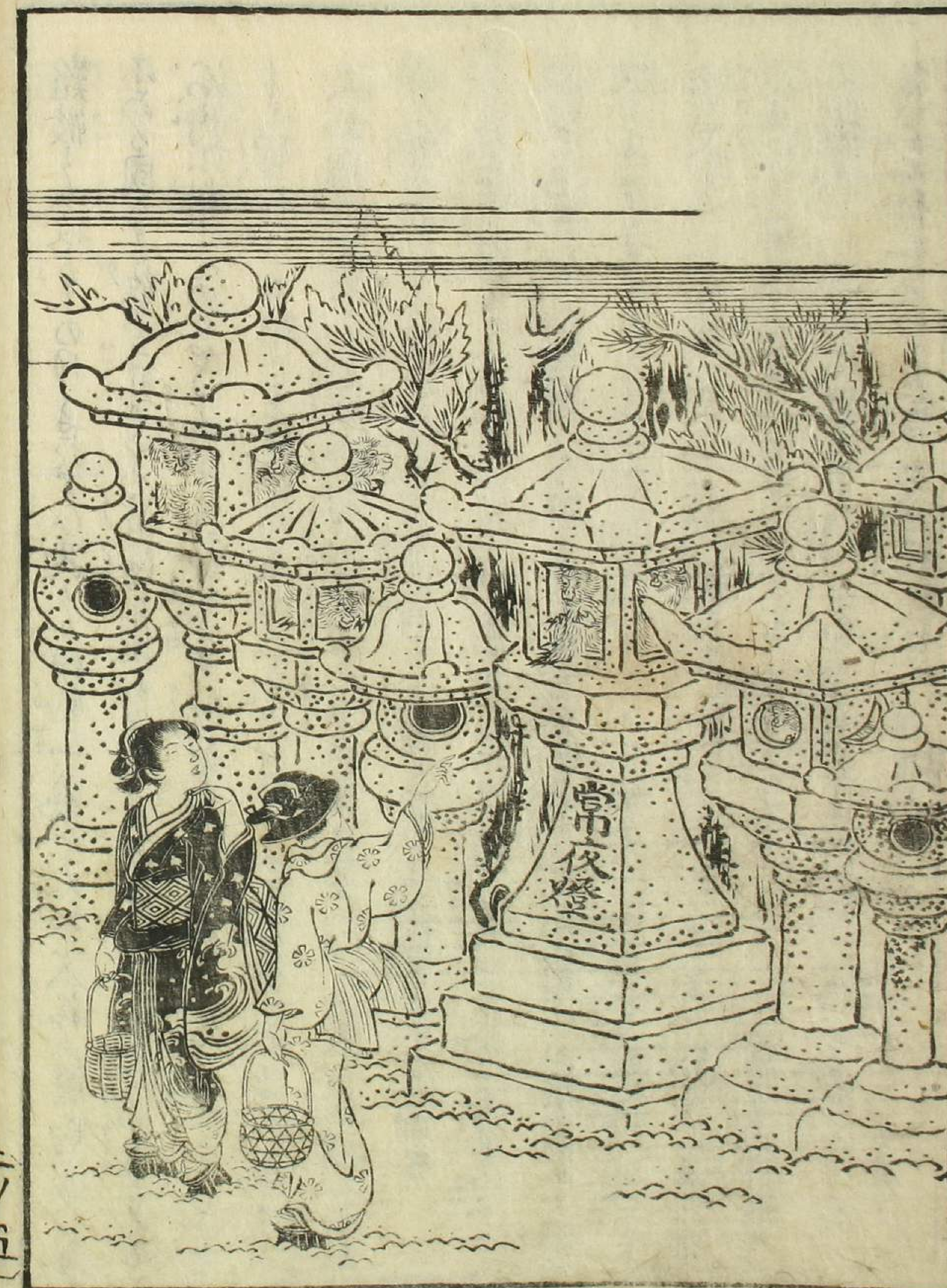
たゝ坂
をみち

千里楓林烟樹深
無朝無暮有猿吟

大和國と號るゝ日本書紀神代卷曰大日本豐秋津洲（日本云耶麻騰）掃人皇乃肇神武天皇天下ふ王るふ逮て神代の蹤ふ繼日向國宮崎ふ都しるゝ
此は天下草昧ふして封域いまゝ定らゞ帝東征給しゝて後初く那ゝ
大和國橿原宮ふ定まゝ國造ふ珍彦を居のひ給ふ故ふ大和國を
日本の惣號ゝ皇居ふ當ふ國名と通稱して一國の名とせり
續日本紀曰聖武帝天平九年大倭國を改て大養德國と同十九年又
改て舊ふ依て大倭國と稱ふ（拾芥抄曰天平勝寶年中ふ改て大和國と）延喜開題記曰大
倭國草昧のゝ居舍いまゝ有ゝ人民唯ふ據て窩を定ふ
ふ戶と云ふ釋日本紀曰開闢の始土地濕ゝ乾ゝ泥ふ登ふ人の狀あ
ゝふ云ふ跡と云ふ善隣國寶記曰後漢書倭王居耶摩堆蓋此國
人到彼土稱大倭故如此書乎云云日本世記曰（釋道顯）東朝ゝ大倭乃二字
連綿せるゝ或ふ本朝ゝ書して異朝ふ從ひ或ふ異域ふ稱て我
朝後ふ和と云ふ日本釋名曰（貝原篤信）神武帝日向ゝ東征ふ行ふ

難波ゝ牧方ふのぼゝ出たゝひ其ゝ伊駄ふ越て大和ふ入ふ膽駄ふの外
ふある國ゝ故ふ外と云ふ淀ふの內ふある國ゝ故ふ內と云ふ淀ふの內ふ對して外と云ふ
ふの內ふ對しての名ゝ故ふ伊駄ふの背にある北の國と云ふ背國と云ふ
ふ背北ゝ續日本後紀曰兼和三年十月己未兼前之例畿內國次以
大和國處之第一勅宜拠新式改之以山城國處之第一云云日本正統圖曰大和
國大管十五郡山繞而種生十倍出國之差圖名所舊跡繁大上上國也
宗良親王流上郡ゝ日本紀曰崇神天皇二年武埴安彥と妻の吾田媛と
國家ふ傾んと云ふ背國ゝ拠ゝ出ふる官軍那羅山ふ屯聚して草木ふ蹈
踏しゝ行ゝ其ゝ國ゝ人輪韓ふ似て狡ゝ狡ふ挑ふ狡ふ挑ふ狡
ふの人その心ふ挑ふ心と云ふ號く那羅と云ふ（和名抄泉州泉郡東大寺建立の時木津ふ在ゝ）朝敵の軍敗ふ武埴
安彥夫婦ふ官軍ふ敗ふ對取ふ爰ふ忌瓮と云ふ和珥の武鍬坂ふ
上ふ鎮坐ふ忌瓮青瓷ゝ酒器ゝ（神祇拾遺）瓮ふ酒ふ入ふ（詞林採葉抄）
ゝ冊ふ青幣ゝ枕詞ふ（拾遺抄說ゝ通ふ）

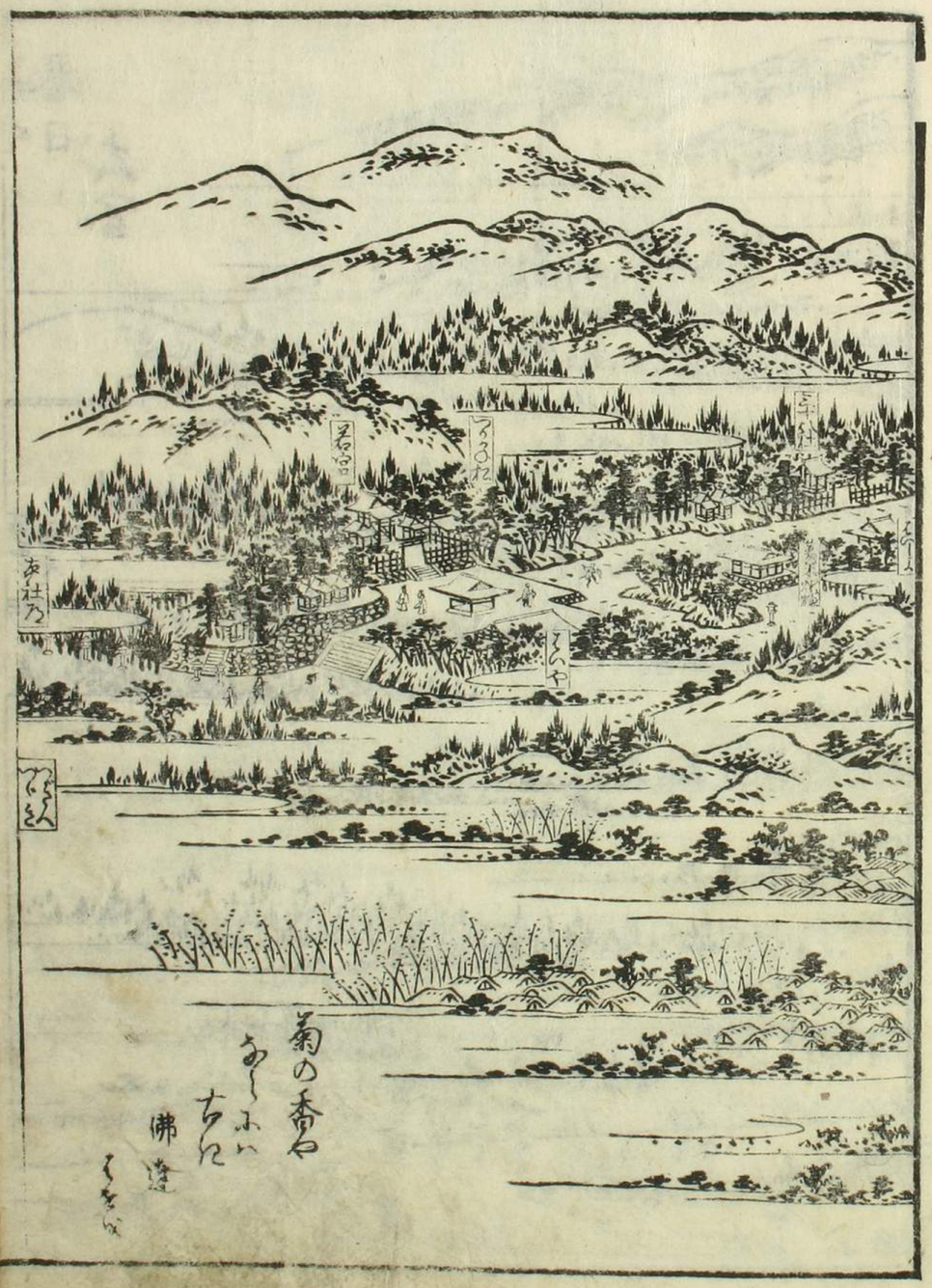
後拾遺
白雪の
また
ふる里乃
春日野に
いさ
うちはらひ
若な
摘てん
能宣

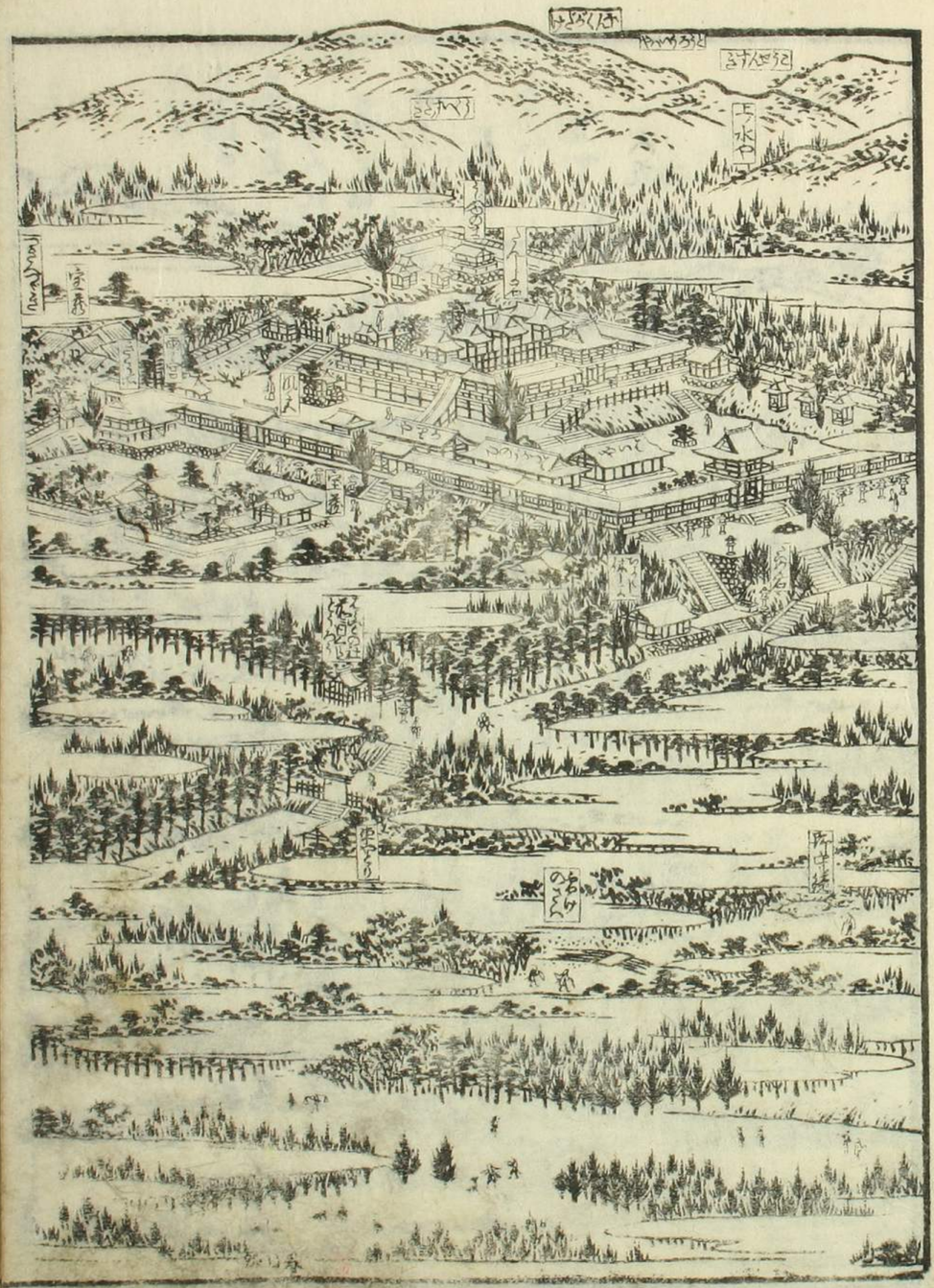

常夜燈

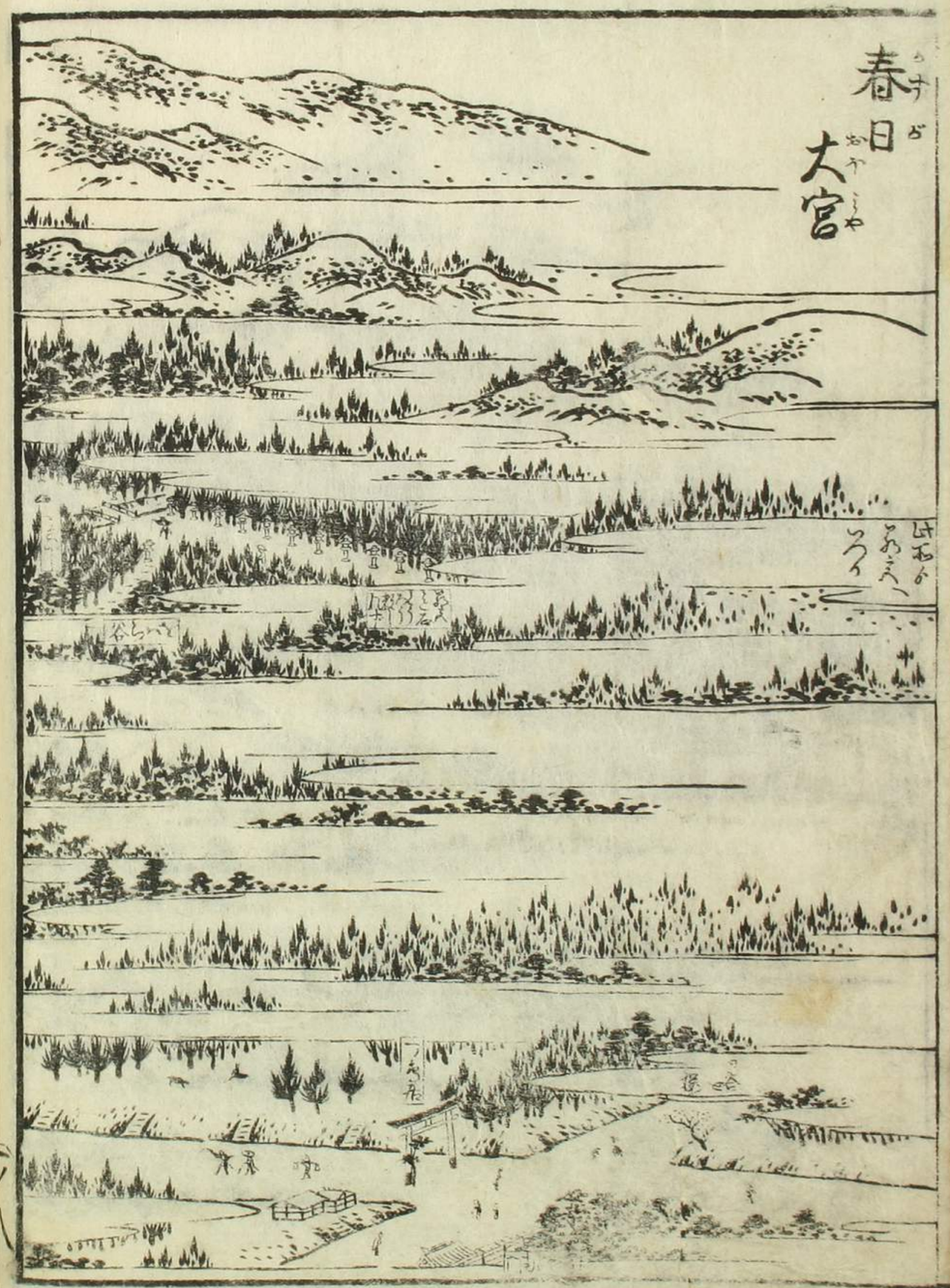
平城の皇城は文武帝の母后元明天皇和銅二年をもつて那羅の郡に建つ
なり（那羅諸樂寧樂乃樂平櫛同じ）二年小遷都ありて七代の御門（元明元正聖武孝謙淳仁光仁）奈良の
皇居あり桓武天皇延暦三年に山城國長岡宮に遷都し同十三年平安城
小遷りなりた京は今の東都右京は西京なり
万葉
あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今さかりなり
新勅
青丹よし奈良の都の遠つ神もてはやすらしいまさかりなり　聖武天皇
拾遺
そらにのみ雪は降りつつ春の日の光にまがふ花の白雲　人丸
皇居の跡今の奈良の町なり興福寺の西超昇寺郷二条村の東往
道の巽に築地の内とて宮の地あり今も田畑なれど入江新宮内裏乃宮
なり小祠あり
古今
あをによし奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな　拾遺平城天皇天同天子
保安百首
草さかりの野辺の石とをの人のみぬ形見なりけり　源仲正
後拾
ふるの石おほ宮の子孫世にふりぬれどいまだ絶えずとぞ聞く　法下公乃

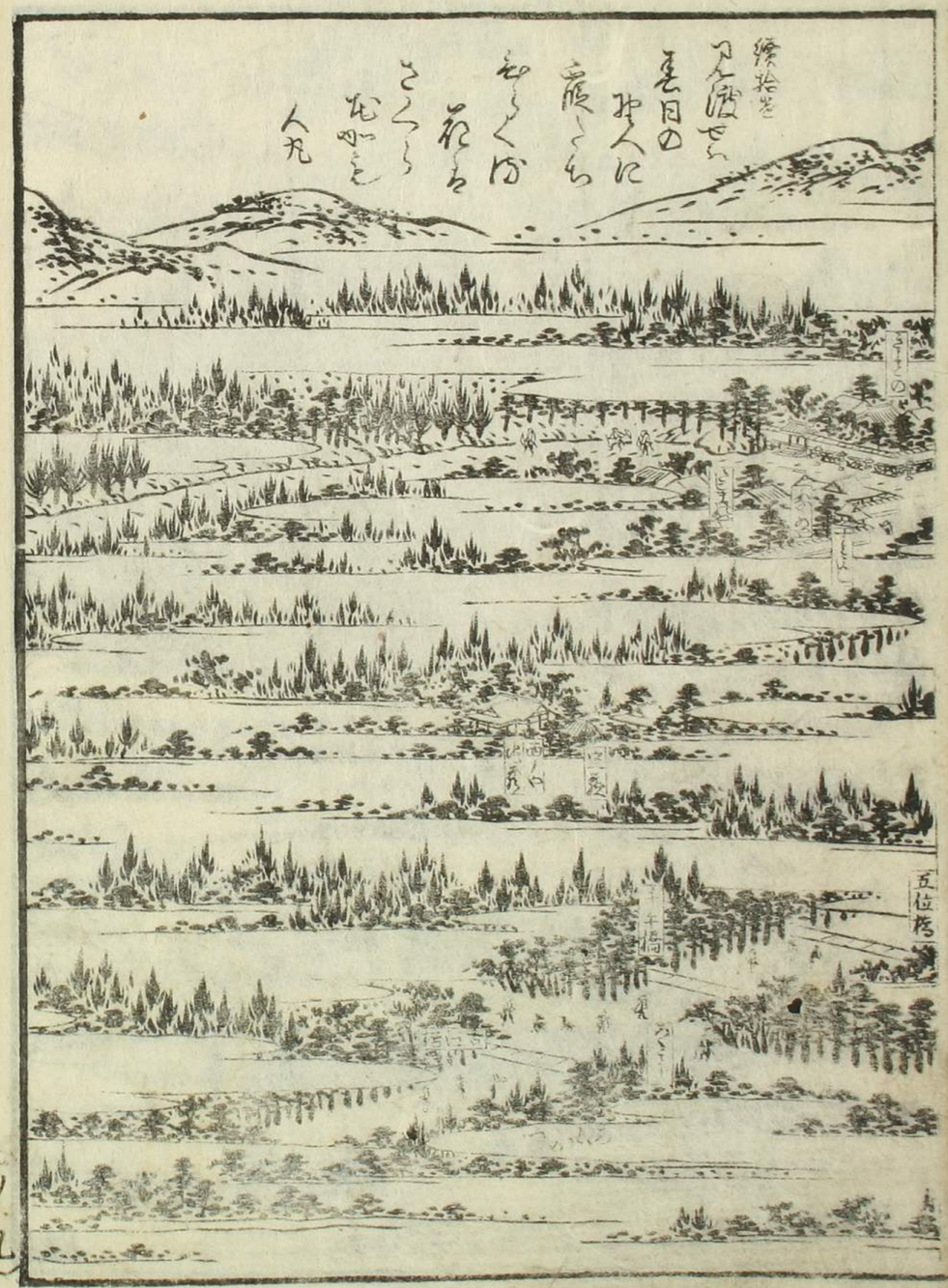
春日社は大名帳に春日と名づけ春日と名づけ
代のむかし天照大神邪神七億九千を征討げ正心ふかく万民をやすく
なる公以て天照大神の御心清淨和平なる春の日の長閑
なる御心地なり春日と御歌をひとの新乃里を春日とかづけ
又興登産霊命の（天津児屋根）
この下は岩根に宮ゝ社なり
のうへは雲霧霊験日日に新なり
古今
春日のゝ若草かりて生ずる年のうれしの
拾遺
若草は時つかうへに春日野の若草のうへの君ぞ忘れぬ　忠峯
新古今
ひとをのくおくるのうれしなれば春の野の若草のうへの君ぞ忘れぬ　忠房
古今八集
無臭無聲野色妍只省麋鹿食草眠
春日野庶
舞深山與文霊圃斯處聖神易地然
勸修寺參議右大辨經重
同
春日山ゝ岩のあなゝ　清水谷權中納言公勝

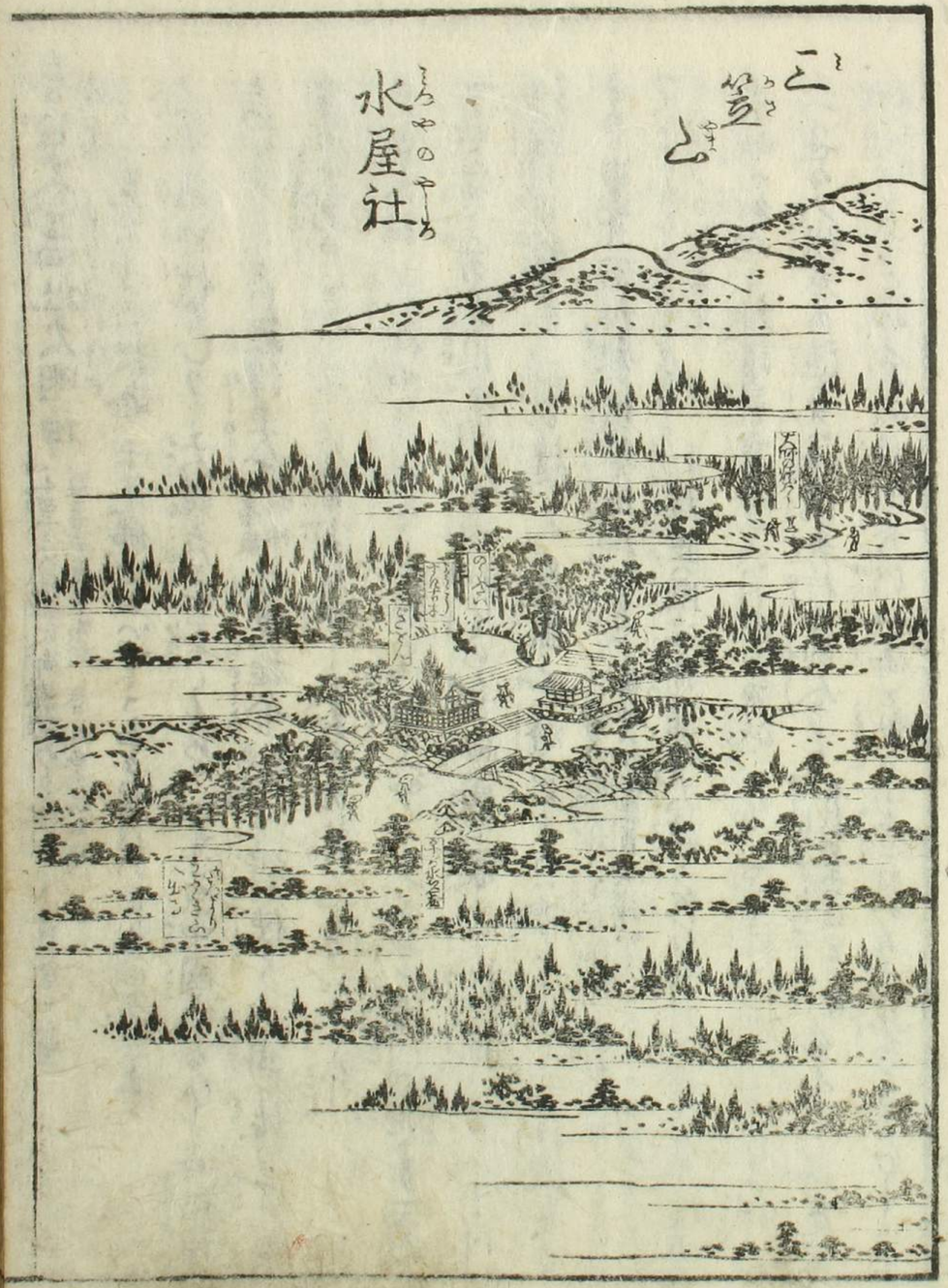
春日山
若宮
新茶師寺


菊の香や
奈良ふの
古仏
佛道




春日大宮


五位橋


水屋社

春日大宮四社大明神　三笠山の麓に御鎮坐あり帝都より行程十一里

續古今　亦ぞとし釈迦牟尼佛世にいでゝさやけき月の世を照さん　春日大明神御歌　延喜式神名帳曰　春日祭神四座

そも此神は神代のむかし天津彦天皇子くだりて葦原中國に入給ひし時邪神ささへなりしかバ經津主命 香取明神 武甕槌命 鹿嶋明神 追討使として國を治め給ひなり天の岩戸をおしひらき常闇を照して萬民の愁をやすんじ玉ひ天照太神 天津児屋根命合躰の御契ふかくして御裳濯川のながれをうけてせバ三笠山の春風長閑に示現利生の靈跡國を康じ王法を輔くる事ハすぐれ社頭の見揚まで二階の樓門四面の廻廊夜燈の光ハ煌々として四の社壇整々たり。東第一の神殿ハ武甕槌神をまつる　又の御名。武雷神。建布都神。豊布都神ともいふ此神ハ伊弉諾尊火神をきり給ふ其つるぎよりつたゝりし血なりといへり 日本紀　初ハ陸奥國塩竈浦に天降り給ひ邪神を征し常陸國鹿嶋に御向し神護景雲元年六月廿一日鹿嶋を出させ同年十二月七日當山の御にうつせ給ふ供奉の隨身ハ時風秀行の両人なり　時風の末ハ神宮の預　秀行の末ハ造宮の預　今ハ合斜に　禰宜の祖 春本氏　其時時風秀行供御を献るに長さにあたりし柴をさしはさみ

神感ありて植栗の姓をぞ給ひける時風秀行の末葉中臣の姓乃下より植栗氏とあらたむ此の藍觴ハ同二年正月九日大和國安部山にうつり同年十一月九日三笠山にうつり給ふ 已上春日古記大意又公事根源の說くらく又感裏記に日明神白丸來給ふ新見おり又三笠山の上に　數の上に榊をもちたる人に五色の雲たなびきて三笠山にうつり給ふとあり　五つの神徳あらはれて照して三笠山にうつり給ふ。第二の神殿ハ經津主命　御名　齋主神又齋之大人ともいふ伊弉諾尊火の神をきり給ふ劔の刃よりしたゝる血化してなりたまふ神なり出雲國五十田狹の小汀に天降り此國の邪神を鎮め給ふ 已上日本紀　下総國香取明神是なり神護景雲二年に三笠山に遷座あり 春日古記　。第三の神殿ハ天児屋根命　中臣の祖神なり又の御名津速魂尊兒市千魂尊兒興登魂命 已上舊事紀　興台産霊神の児なりとも 日本紀　天照太神天の岩戸に閉籠りたまひて四海常闇になりけれハ諸神と共に天香山の五百箇眞坂樹を根こじにして上つえに八坂瓊の五百箇御統をかけ中つえに八咫の鏡をかけ下つえに青和幣白和幣をかけ祈りのりとを申しければ岩戸をひらかれたり常闇の光かゞやき夜益かへりて　日本紀

河内國平岡明神之御鎮座ハ人皇三十七代孝徳天皇四年十一月戊申の日三神にしたがつて三笠山に遷座ある　已上春日社記に見へたり公事根源に神護景雲二年四社明神一所に御鎮座のよしをのせけり

第四の神殿ハ姫太神　又の御名大日靈貴又大日靈尊ともいふ　則伊勢國五十鈴川乃内宮天照太神の事なりとぞ　已上春日社記又一説に天照太神の分神として又或説に天児屋根の御妻守児姫太神ハ武甕槌命の姫君なりとて

女之故に平岡明神の相殿にはしたがへ奉り建御賀豆智命伊波比主の二柱の大神と江一位大明屋根命
して勅命あり（建御賀豆智命）紀曰嘉祥三年九月参議藤原朝臣遣
はは従一位比賣神と正四位上の崇ありしは位階ふるしくなる
御妻女の説も可

中院小社六座（瑞離の外）　岩本祠（本社の神にあり）　神護寺（東の方あり）　青榊祠（復古の神社なり）
（神護寺の南小社あり）　青和幣　辛榊祠（辛榊の南にあり）　穴栗祠（辛榊の南にあり）　井栗祠（穴栗の南にあり）
内院小社二座（瑞離の裏を内院と云）　手力雄神（南の一座）　飛来天神（北の一座）　天御中主尊　高御産尊

直會殿と勅使上卿の事を行ふ所を講屋と號し法華八講を修す

せられしときの名人（八講の名人長者に負伝を別當に平源大僧正より古今集に大直
日と云ふ）　幣殿（直會殿の勅使幣を指らる所にあり毎年二月八日の夜金剛保生の三座より年頭
に所へ）　舞殿（元年の造立なり）

鹿走（寛文記曰廊の向にあり毎年二月八日の夜金剛保生の三座より年頭
の役人尚し給ふ奏にて公麻走にて仕者二の神殿より神酒御供物
幣殿のおふあり春日の日）　御くしげ小田廊の向にあり春日の日勅使に所へ

林檎庭（幣殿の向にあり）　楼門の東れ　二位橋（楼門のまへ橋なり）
（春日記）

一位橋（一位の橋なり）

いのしゝ（春日の牛乃栄）　一鳥居（宝永記曰山門渡殿門にあり寛文記曰此神社なり）

聖の床（田廊の内にあり寛文記曰此神社なり琵琶法師の篭り所なり）

遷殿（八條院の北にあり寛文記曰御造宮の時下遷宮の所と）　南門（楼門と云寛文記曰むしろ額あり
門と云ふ）　宝亀二年造宮の所と光類造建と云ふ）　影向石（南門の東にあり）　如意石（影向石の南にあり康保四年
あれ所に神立祐任大般若経一部
万座の後分納し所なり
（春日記）

布生の橋（布生の橋なり）　布生橋（御向橋）

酒殿（田廊のあにあり酒を造る所）　御供所（内侍門の下西の方にあり
酒殿祠宝亀殿祠の二座あり）

俊喜櫻（天下無雙の名木なり）　内侍門（内侍供所の向にあり寛文記曰）

春日若宮と大明屋根の見天押出命かぶると名法要集にあり
（則内侍門國平岡明神の若宮と天押出命と）　或記曰吉田家の記録に瓊々杵尊と云へり

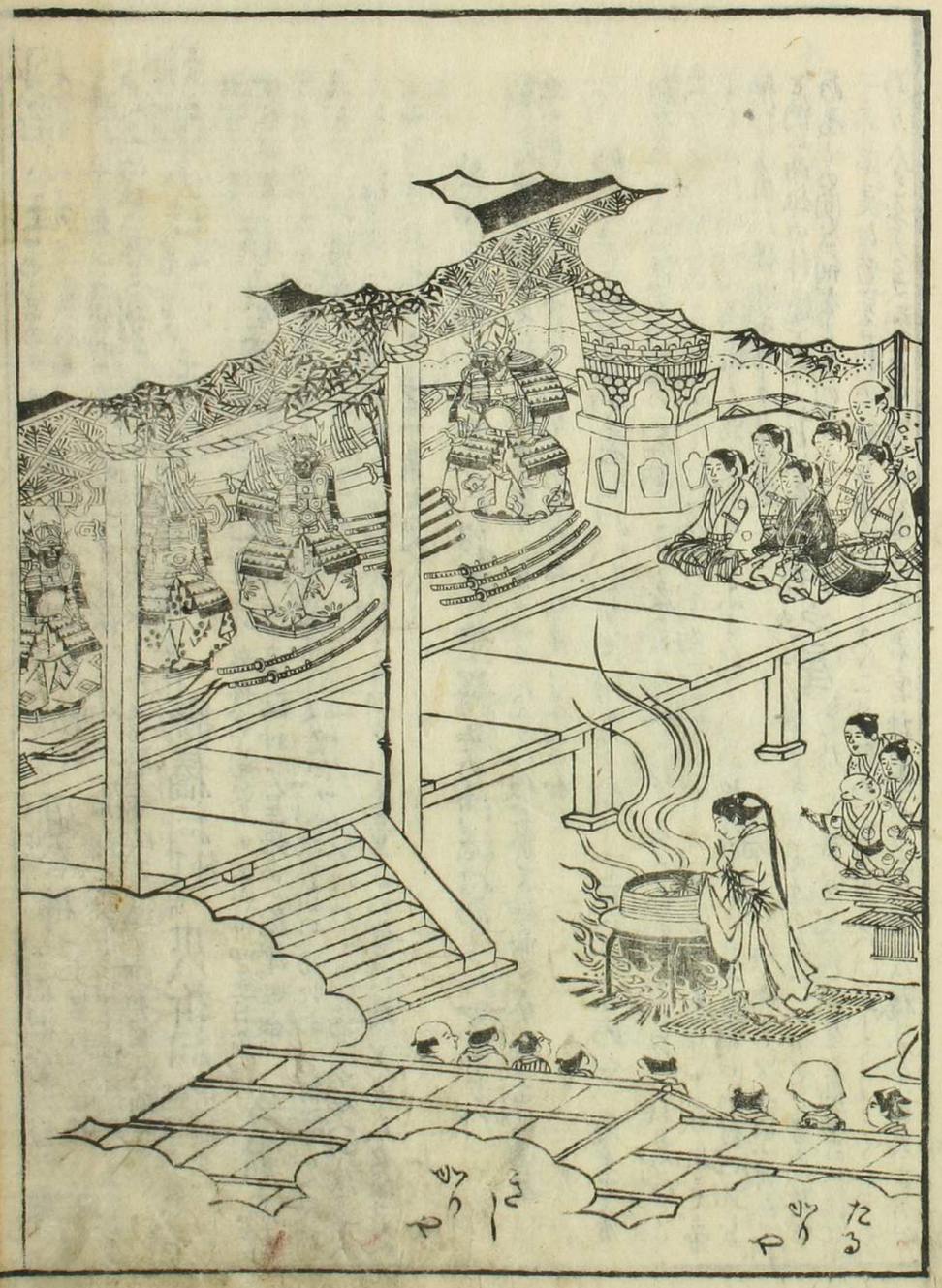
若宮神主唯一家の秘説なり　春日社記　夫若宮の布鎮座

長保五年二月二日三の御殿の向に現出する所ひしかの時風五代の孫
中臣連延忠三の御殿小祝と云ふ　祝なる其後百二十年を歴て長兼
四年四月廿七日時風八世の孫祐房別に神殿を造営して御鎮座
しなり今の若宮大明神是なり

春日の大宮四所の御神事
一年に両度なり二月申日
十一月申日ふるまひ式
仁明帝嘉祥二年
中臣秀基ら
清和帝貞観
十一年十一月九日
庚申の夜
たいや

千載集
常陸

霜月廿六日
御くんぢ掛ものの



内院小社 若宮の内院なり 手力雄神 摂社 通合神 中臣祓所縁の霊なり
二座あり
て後仁平二年十二月廿四日卒しぬ廿七年なり行く治承二年神託によりて通合神
つくかなり 此社小春日曼陀羅とらへあり まあ永三年中若宮殿基通公御夢想の図なり

外院小社 若宮の外院なり 廣瀬祠 俗に思子母神と云へり 縣橋祠 菖蒲神 廿八新祠 神日本磐余彦尊
伊弉諾尊 伊弉冊尊 佐良氣祠 蛭児神 紀伊祠 外院のまにあり 五十猛神 大屋姫命 抓津姫命 糸賀王社
宝永記曰 此天王弘法大師天慶の勅請なり
其東に大師護摩堂 [illegible] 所あり
[illegible] 解脱上人笠置の御所の神を請しひろしを童子の像に現じ上人に授ける
[illegible] 神祇あり 沙石集に見へたり

我ゆらむ物とはなりん殺若臺耀迦の御法けあらんかぎりは

拝殿 寛文記曰 [illegible] 保安三年二月十四日初て此殿に於て神楽を奏し又崇徳院
長兼元年に [illegible] 殿の廊を建る其時のおに

めつらしやなの者日はしら女を神とうれしと思ふらしやや 後京極摂政

[illegible] 光明院の [illegible] 家 [illegible] 恵房
大宮殿の敷石のうへに [illegible] 時の主典不審なり 棟梁 [illegible] 帝
より四所明神 [illegible] 進と勅定あり [illegible] 御廊 寛文記曰 [illegible] 殿の北に
納む屋風八幡 [illegible] 坊より [illegible] 進と 御廊といへり 内に仏舎利
を納む両部の神道をあらはす廊 [illegible] 番にむかひ屋に高倉院治承
[illegible] 拝之屋 寛文記曰 [illegible] 宮の [illegible] 豆
二年造建に毎年薪の能 [illegible] 二日 [illegible] 二日 能
あり 今年 [illegible] 若宮神殿より神酒 [illegible] 余の大夫の時

[illegible] 例なり

五箇屋 新造屋 寛文記曰 [illegible] 新造屋 寛文記曰 [illegible]
[illegible] 西の屋 [illegible] 上の屋 [illegible] 西の屋 [illegible]
[illegible] 薬師 [illegible] 本尊 [illegible] 陀仏 [illegible] 代の作 [illegible]
[illegible] 親鸞聖人の [illegible]

凡之屋 寛文記曰 [illegible] 上之屋 寛文記曰 [illegible]
仏を安置

本談義屋 寛文記曰 [illegible] 若神 [illegible] 知之屋 地蔵尊 [illegible]
[illegible] 仏生国世親菩薩の製 化城喩論十巻 [illegible] 仏舞
[illegible] 寛文記曰 [illegible] 毎年七月十五日
[illegible] 帝 [illegible] 応和
[illegible] 北嶺の名徳二十五人五日十座の論義
[illegible] 寛文記曰 [illegible]

[illegible] 寛文記曰 [illegible]
[illegible] 一家香花 [illegible] 同緋縅 [illegible]
[illegible] 原義家五音戒論 [illegible] 平家盛頼書 [illegible] 正成
[illegible] 鐘 [illegible] 薬師 [illegible] 魔王宮 [illegible] 将来の [illegible]
の画 [illegible]

杜之屋 御屋 個馬屋 迎陽屋の御屋 [illegible] 舟戸屋 九條屋の御屋 [illegible] 寛文記
正月初 [illegible] 舟戸祠 [illegible] 日月海象 [illegible]
海上 [illegible] 杉之屋 [illegible] 椿之屋 [illegible] 大社屋

[illegible]宮祢宜の

渡之屋 社家の

竹之屋 蘭之屋 二ケの屋い

般若屋 大般若経 法師

[illegible]

内侍房 田蔵 茶蔵 [illegible]

安居屋 本朝書史曰 [illegible] 絵所

経蔵 白河法皇 [illegible] 紙金泥の一切経

[illegible]

剱の澤 寛文記曰 [illegible]

水屋社 遷宮の北へ百歩計ふり [illegible] 祢田邑に入

稲田姫 [illegible] 南海神女 毎年四月五日ふ [illegible]

藍舘 伏見院御宇世上疫疾ふ脳さんけ [illegible]

[illegible] 神楽 [illegible] 曲 [illegible] 霊験 [illegible]

順例 [illegible] 牛 [illegible] 石燈爐 寛文記曰 [illegible] 弘法大師 [illegible]

[illegible]屋川 [illegible]

類聚 [illegible]

[illegible]屋の水 [illegible]

丈木

[illegible]屋川 [illegible]

長尾祠 寛文記曰 [illegible] 長尾奥院上ゑ谷祠 [illegible]

平城跡考曰 [illegible] 谷川上六町余 [illegible] 盤面に日月星の [illegible]

[illegible]

日月盤氷室舊地 [illegible]

二笠山 顕注密勘曰 [illegible]

万葉

大石の御笠の山岑にせる細谷川乃清けさわけさ 人丸

拾遺

名のみして [illegible]

後拾

[illegible]

東都八景 白雪無邊藏數峯 和光有跡此山中 徳大寺左近衛大将實孝持

三笠山 干時大樹著花處榮色知新利物功

[illegible]

[illegible]

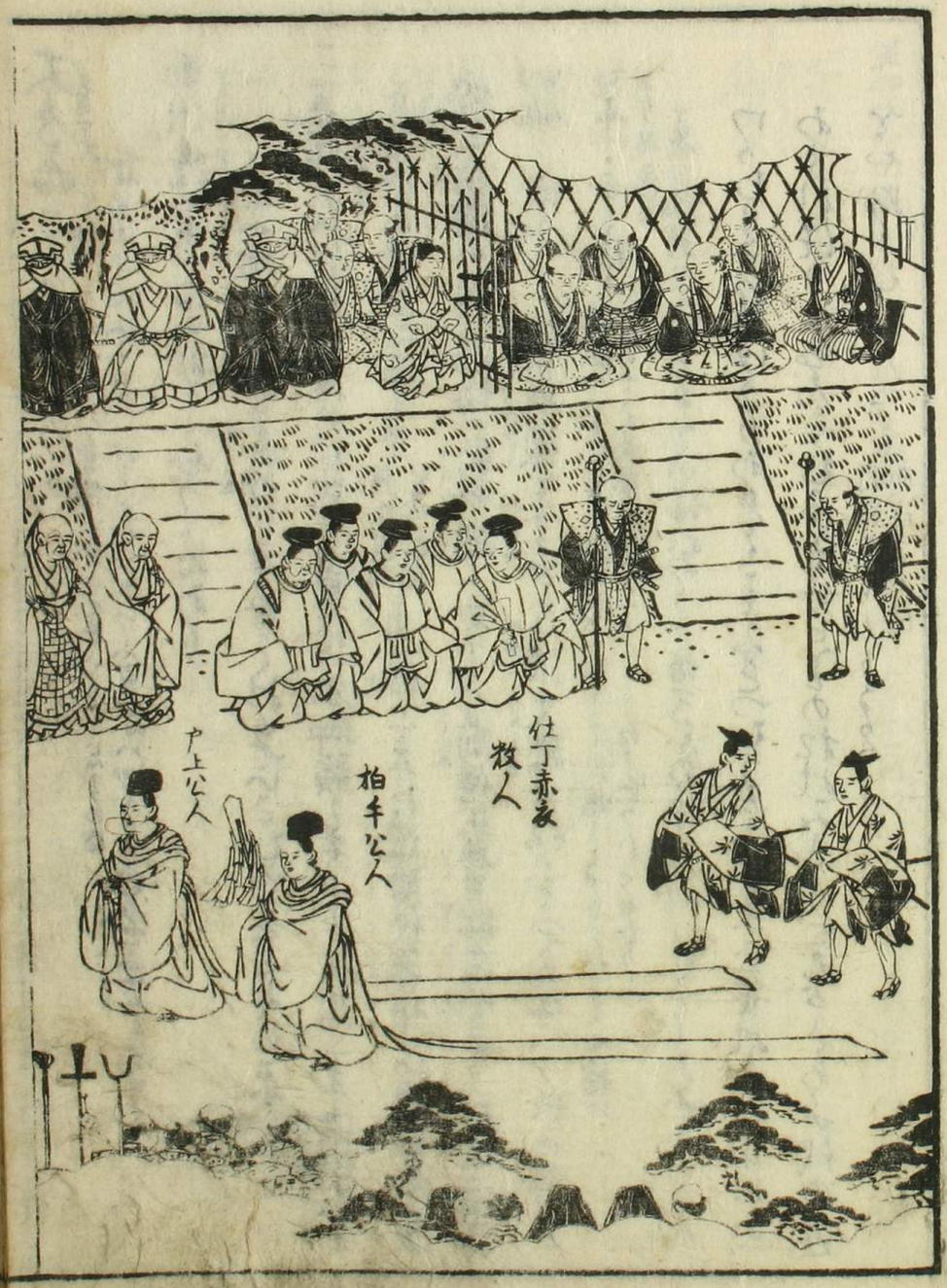
[illegible]

拾遺

二笠山 [illegible]

後拾

[illegible]


仕丁赤衣
牧人
柏手公人
ヤ上公人

春日
若宮
御祭

大石寺に真日北ふあり
真日記に鰐の口寺内に二基に青塔一本ありと
林泰ふ山ゆ〻てつけく寺をくらへ分ふ山けるとの書もあり

馬出橋に石寺のおく〻むりにあり
真日記に据甲斐の国弱ひたるをくけりそいさしる真日北の系

二基塔のわに馬出橋の北ふあり東塔に本御願と号して天安二年深殿大臣良房公の建立之本尊釋迦牟尼佛 地蔵 観音 負観之 を奉に遣唐使感得して来朝の霊佛赤栴檀の像 西塔に新御願と号して前僧正賢昭造営されし東塔乃四佛と同〻して銀の佛像 安置之後ふ文殊 弥陀 釈迦 五佛〻共ふ獅子分坐 應永十八年二基の塔雷火にかかりて焼燼 霊佛 つらなくて長講堂再建あり〻ここにうけさせられ〻ひ〻り 再建あり〻ここにうけさせられ〻ひ〻り 真日記の〻に二りゆその塔れあり〻ふ山るあの塔分あり〻もそ〻ろふ〻〻ん

わ〻むしをなのゆ〻りあとそ〻みとつむ〻るふ無系丈無れう〻〻ふ山む
わ〻れはりそ〻ろそむ〻るもかとの枯れみ〻ぐり〻石ら〻〻ゆみ代の色
をやぬく〻むし〻ん 元 行間に仏ふ〻〻 所詳 〻〻に

若宮の御旅所大石寺の西〻ふあり真日北宮〻もしく常を宮石寺
ふ〻芝生の森分むをび尾花おかとく本の系路分る道もふ〻〻ふ山の
御系ふ山ふ〻本の〻ら〻れの系れ軒端ふ〻〻りる神殿分いしろ〻み
若宮を殿御ふ〻する 毎年八月十一日〻ふ山り殿の用本大和國より所分例
初に御縄棟の式れあり 真日の二百一鵜 式ふ山り〻〻本分代ふ〻真日の候理日代 遷宮 九月朔日殿
鳥帽子赤襖を着して 十四若の七郷十六町より出る御輦三十六牧分ふ弱谷村より年ふ山りに持ふ山西〻る
これ分修造に
若宮澤に御旅所の北れひ〻〻り東〻分入細道あり
風雅
真〻れに若宮の沢ふ神〻ふ山る
松川大系百首
真日北の若宮の沢に神〻れ若〻〻あり〻ふ小芹を採ふ山 仲実
真日北の東の細石〻れを〻〻ふ山〻〻ふ山分澤〻川〻むり御接あり
崇徳院
真川に道の東の細石〻れを〻〻ふ山〻〻ふ山分澤〻川〻むり御接あり
所〻〻〻と鹿道と〻〻ふ山真日明神麻に発して〻〻り〻〻ふ山道あり
とら〻ふ山ふ山法師の撰集抄〻〻〻〻分六道と〻〻れ〻り
若叛橋 車屋殿 五位橋 二石寺を切末にあり

多武峯の左右の間の東西やあつらへ給へる方の神く

榎戸神祠　榎戸神前の石燈籠　世に名高し　惣高サ六尺一寸五分　灯袋六角

神垣　**表神垣**　榎戸の北にあり

風雅

神垣の表は茅葺にして尾花を結ぶ春日神の原　院兵衛督

王吟

みよ振神垣とかこそんん日や拾ひ人忘れてこそりうるへこと　家隆

着到殿　神垣表より右の方にあり延喜十六年の造立　春日社の勅使に造人　解脱上人の弟子僧祐璋　碩学の人あり　社務に語せり　地獄谷　解脱上人　我大明神の御方便なりいふ　寂の淵　ある女の身に宿る　拾ひ出し　情過　ありしかの地獄へ墜ちぬ　春日神の下に地獄あり　ある深夜の鬼あり　化方の地獄　そしふあり　我も魔道に沉つ　春日社の東方　和光結縁の塔　感歎　榎本祠　榎本の前に　春日社の東にあり　新橋田表神　春瀧青瀧

榎本祠　榎本の前にあり中間道　春日古記　春瀧の橋　春日社の東にあり　神あがらせ給ひ　祝や邪身　解脱上人

今

なのりのもらるゝこと笠の中間道　板の下　板やうらひの橋

釼先石　神垣表にあり　此石を忘れて見ぬ人なし　其の名を知らぬ人なし　元弘二年立石　月次の屏風　春日社の儀式ある所　彩千載

えらうはそらさくもこそ　生永智　春日社の石の菩提　春日社の儀式ある所

みよ振神の多武峯通る　社殿回廊の東にあり　内侍門　回廊の北にあり　僧正門　回廊の中にあり

御手洗川　社殿回廊の東にあり　内侍門　回廊の北にあり　僧正門　回廊の中にあり

慶賀門　回廊の南に門なり　法華二〇の造立

外院の小社八座　外院　忠隆　忠隆の子　伊勢諸尊　瑞籬の内

榎本祠　忠隆の子　榎本の前にあり　**招本祠**　榎本の前にあり　大山上比

佐軍祠　田心姫命　**栗幸祠**　栗幸祠の西　**海本祠**　栗幸祠の西

八雷神祠　海本の東にあり　春日古記に見えたり

杜の下乃
春日御茶屋

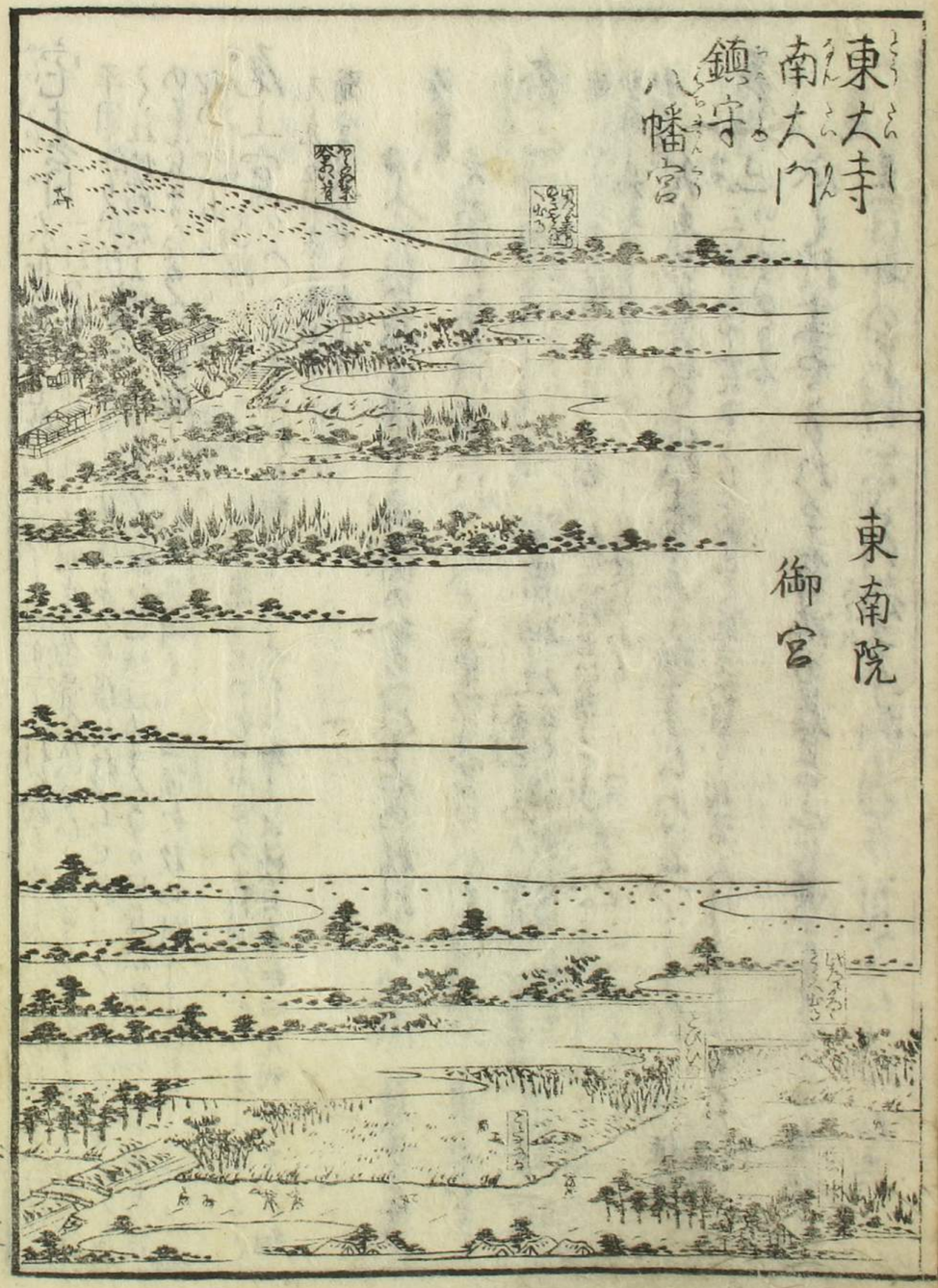
借香山　吉日山の名所なり　哥枕
万葉集に備香能山とかけり
ひかりこの賀さしこめふわとをりの山のこゑ枝をわたる

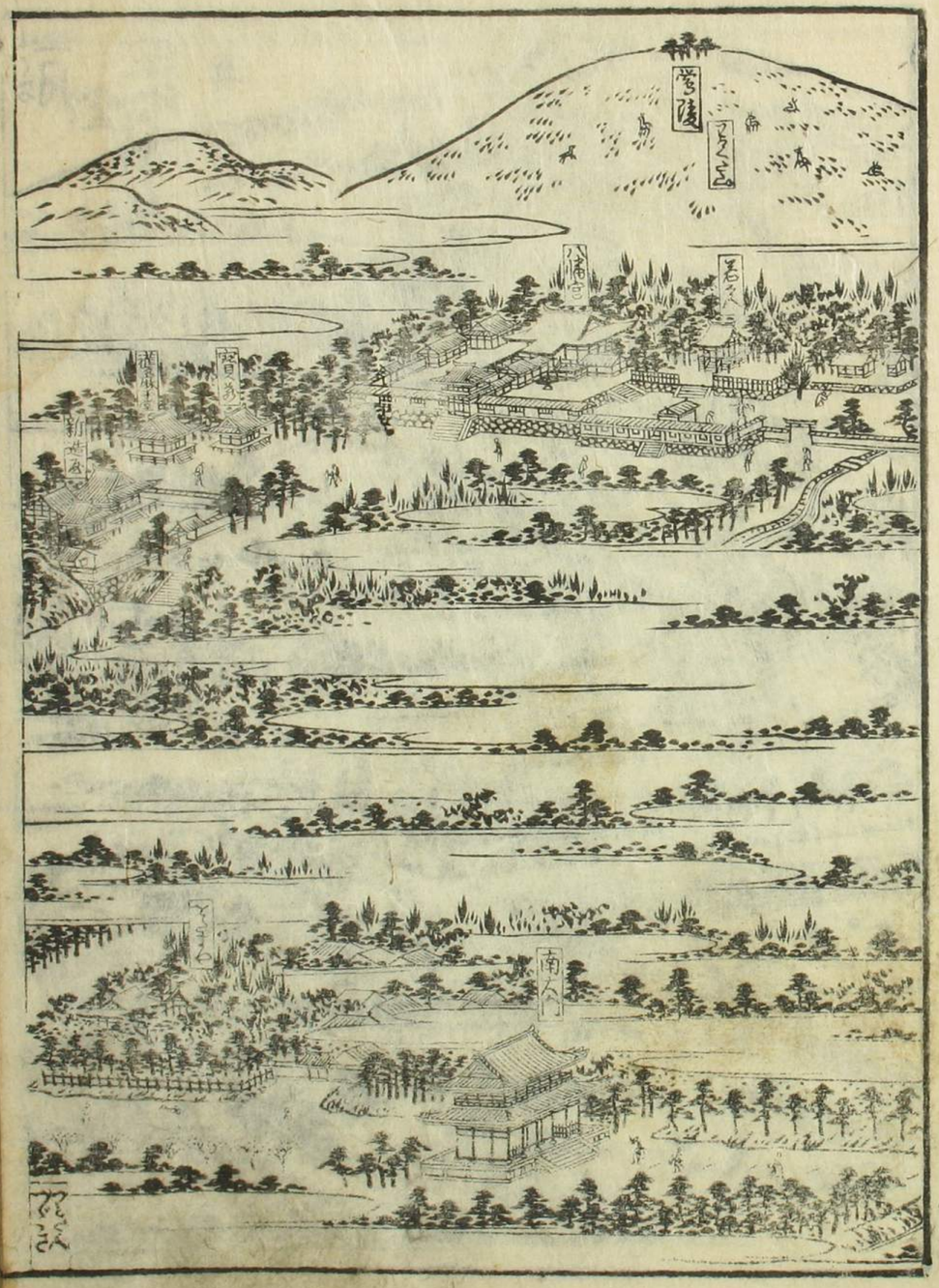
本宮嵩　實文記曰長滝の内宮の南に殿建甕能神護景雲二年霜月九日初てここに移し奉る同年正月今の社へうつせりひしり
本宮　本宮出嶽　もと本宮の社水谷の社わら

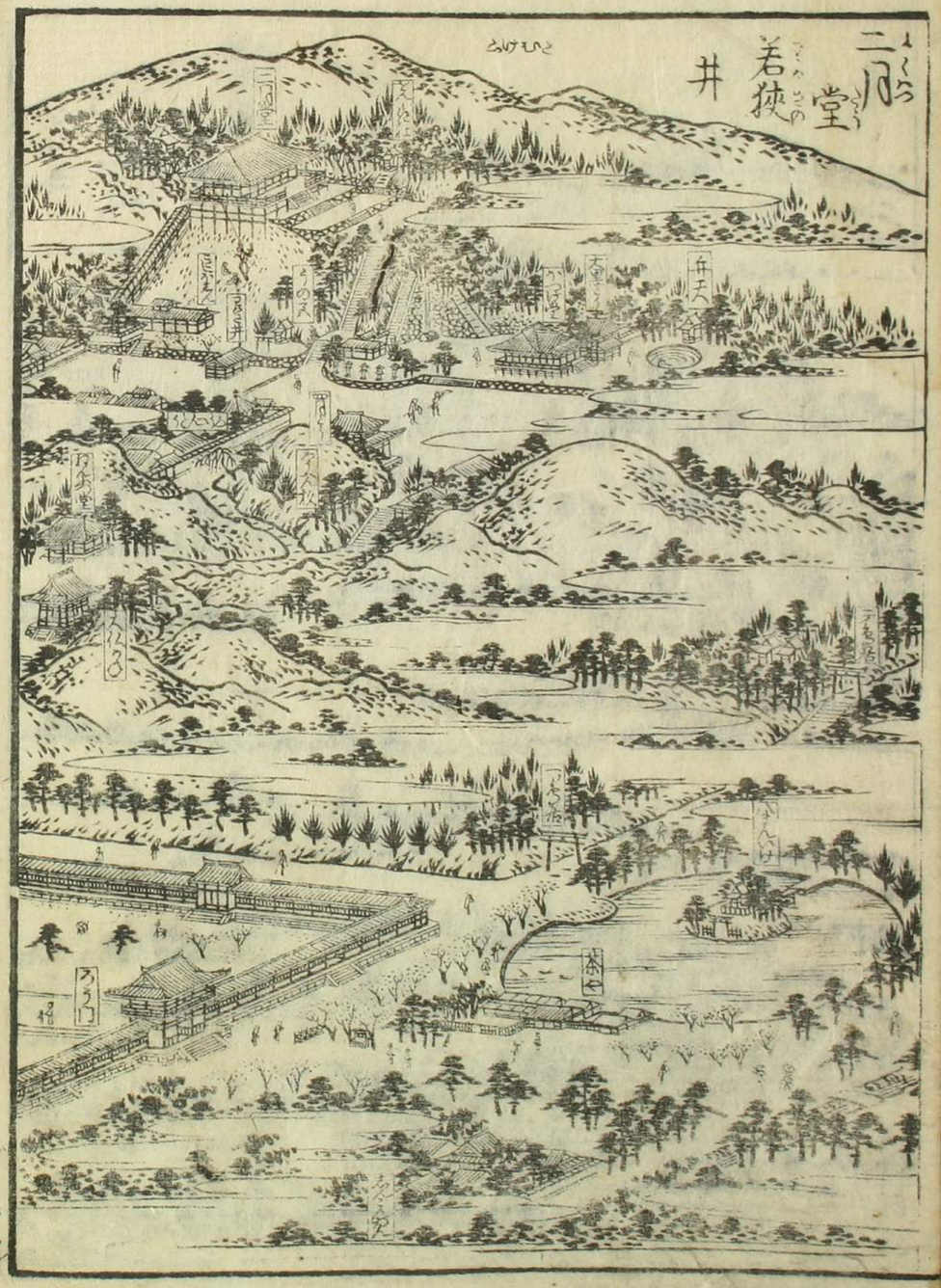
高圓山　三笠山の南に
彩古今
高原の野辺の秋萩咲ぬらん　後京極基俊
後撰撰
萩の露の玉ぬきかけてをる風を吹ぬるかな　後京極院
玉葉
たづねこそ高圓山の秋萩は色こそ風の音にきけ　後深草院
続古今載
高圓の野辺の秋萩咲ぬらん旅行人の袖ふれかな　後伏見院
彩拾集
吉野たかひくやまのゆふ日影こぬ人をまつ高圓の山　志人
白毫寺　高圓山にあり　天智帝の御願にて本尊は阿弥陀佛吉日の作なり
閻魔堂の佛像は官位相の御作なり　藏尊は小野篁の作なり　西大寺真正
菩薩の弟子道照入唐して一切經を持来りしを納るなり

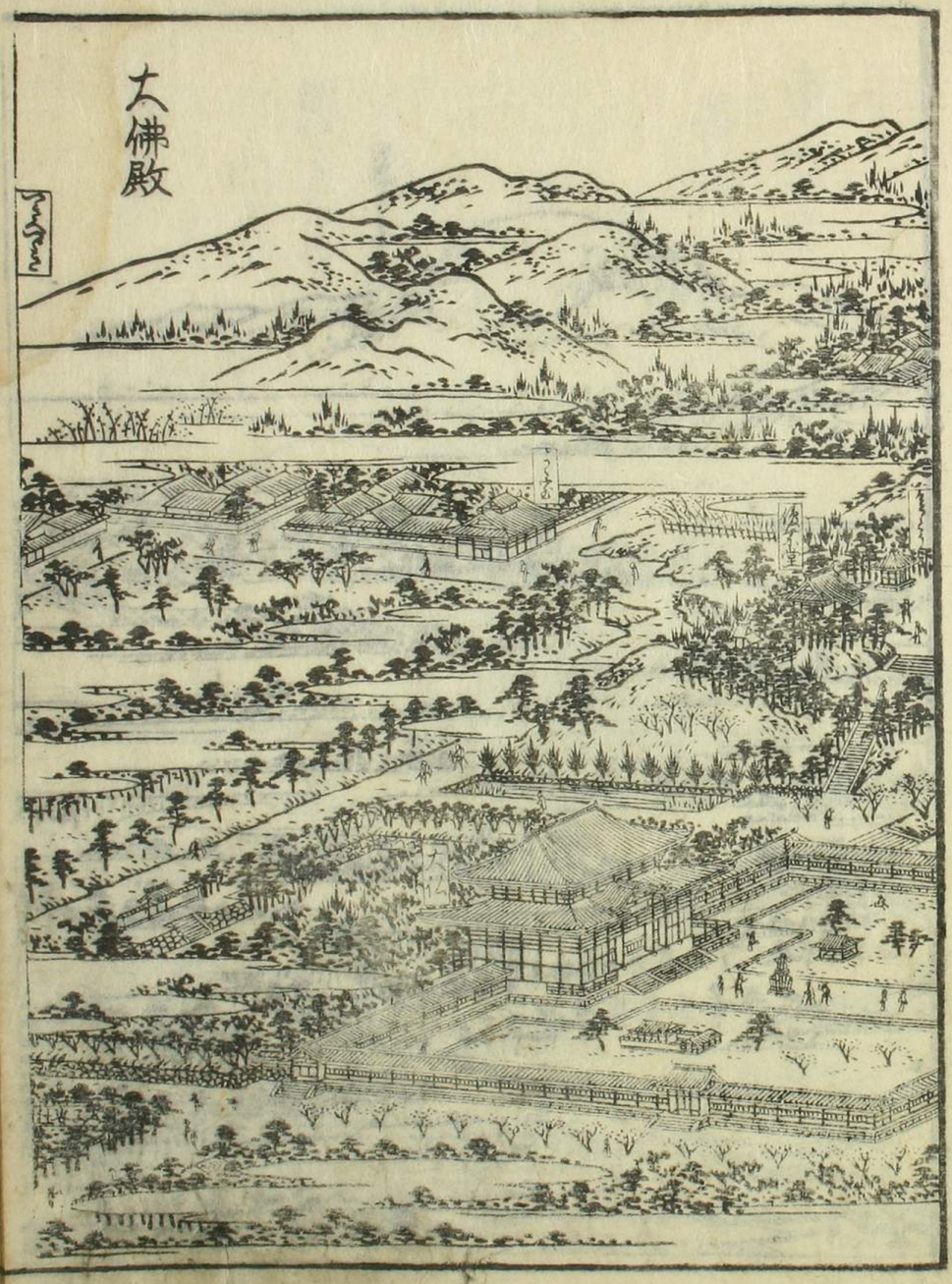
宅吉日　大和志曰宅郷已小廢しかれども宅郷吉日しかれども社伝曰
一社は吉日の神一社は法明房忍賀入唐しかれども春日神記曰天明神
平岡の明神に祈て焼ぬ故に燒春日と云て社記曰は社の本人なり田なし板町しかれども尚ほ田植に板の代と云は新りはたらる
の業なれども板の代なり
尾上宮　元興寺の別あり　尾上宮の北に古寺の上社園にあり尾上離宮と
元興寺にあり　傳記曰尾上宮とは聖徳太子の御代に離宮とかの御に續日本紀曰元明天皇和銅
元年九月幸吉日の
離宮に入らせ給へ

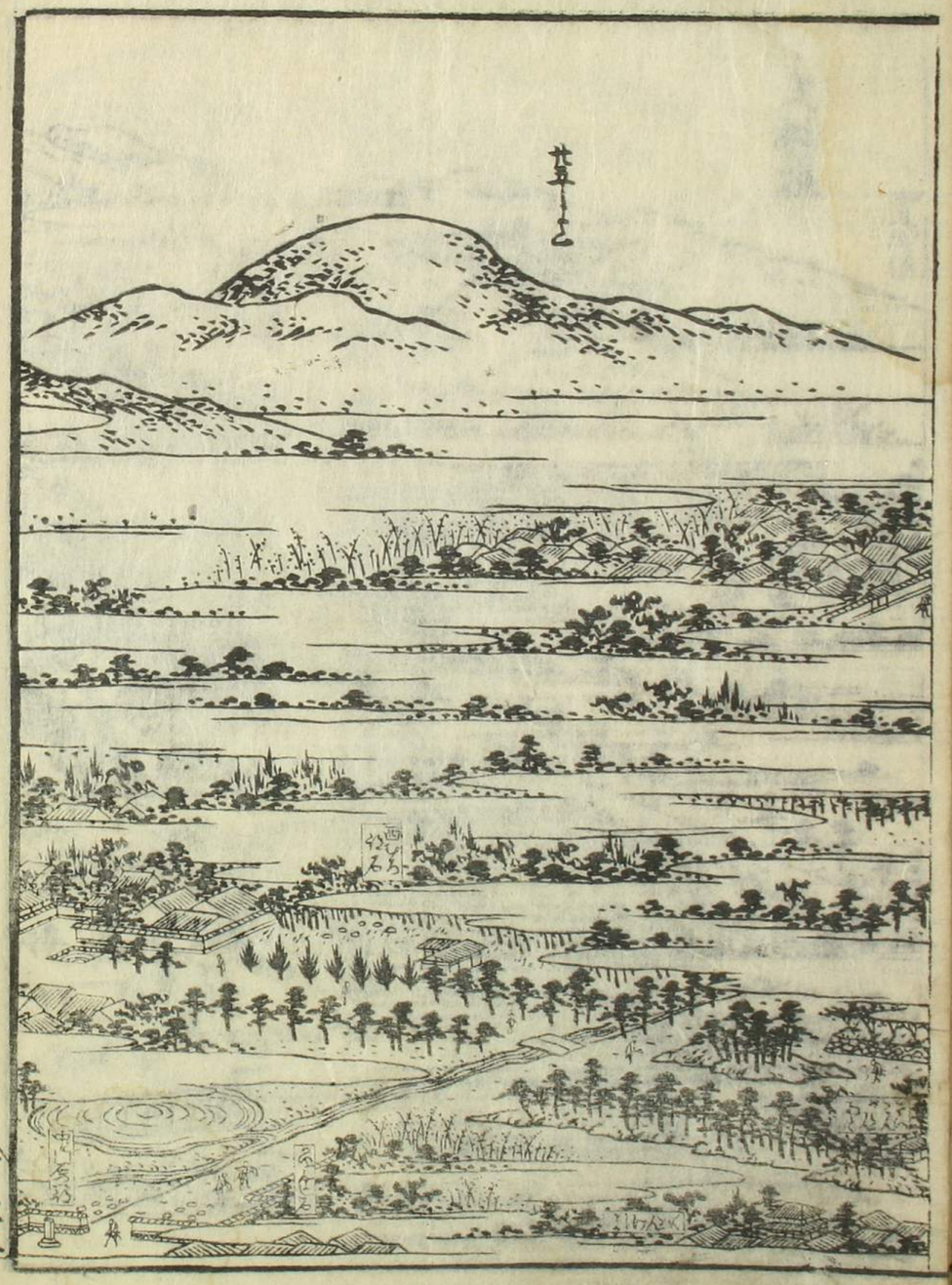
ゆくすえ夜を深し　元圓のおのへの秋萩の風　續拾集古今
續拾集
元圓のおのへの秋萩ちらすな宮人も通いぬ　従二位家
香山　石集曰高天吉日の神　鳴雷神社　香山に延喜式に代実録　高嶽本宮嶽の
南ふわり實文記曰二宮あり　髪生宮と称す
社家　社家　社家　こつをいとなる
彩後拾
名をのみ吉野の山の秋萩の色ふかく染てしぐれ　順徳院
若竹　三笠山の山にうゑひろく延宝記曰こがらの人ほどらをとりの人九
夫木
今又往妻やこうれる吉日野の若竹山に芽そなく　中務卿
宗枕
吉日野の若竹ふる雨雑今朝の初音ふる目をなしつ　好忠

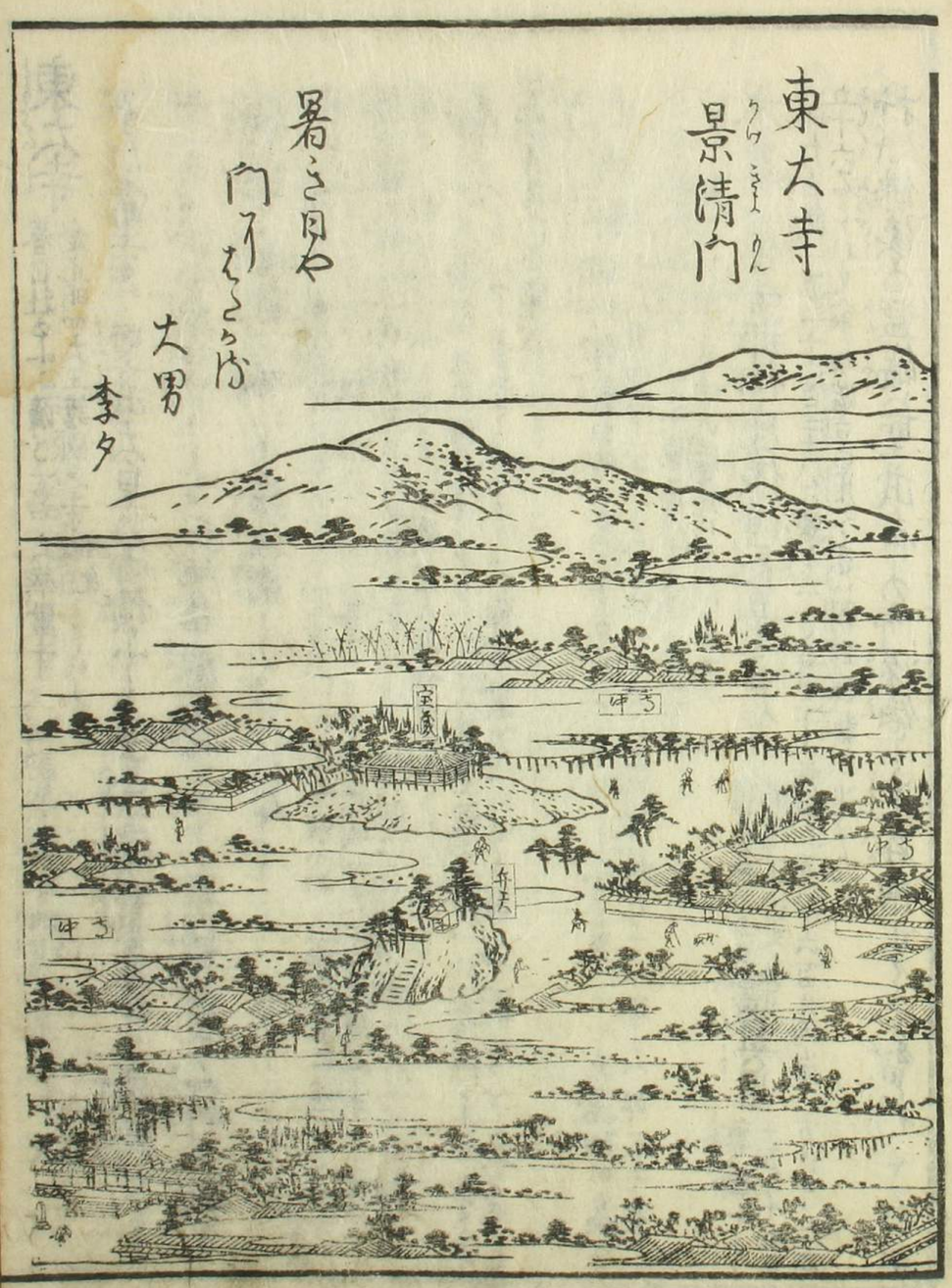

東大寺
南大門
鎮守
八幡宮
東南院
御宮


八幡宮
南大門


二月堂
若狭の井


大佛殿




東大寺
景清門
暑さ日や
門すゝらん
大男
李夕

東大寺 春日社の小藤と一名大華嚴寺又恒說華嚴寺佛法傳通記又國分寺又金光明四天王護國之寺續日本紀

そもそも當寺は聖武大皇の御願にして天平勝寶年中に成就せり

宗名は八宗兼學なりてこの論華嚴を以て本とす麝香石竹に眠る

鹿は金桃を咏じの給孤園にもいひつべし

西大門 平城跡考曰東大寺西面の門を云井堰ふわり俗に云井堰門と云門額に弘法大師の筆にて金光明四天王護國之寺と書額の緣に梵天帝釋四天王の像を彫り長八尺巾六尺山門額にくのち額を東大寺穀屋室藏にあり門の礎に井堰の名ありに拙しとり

南大門 額に弘法大師の筆にて八宗兼學と云ふこの論華嚴を除にせり爭華嚴にてなる西面の門の額なり

大佛殿 朝野群載曰殿の高さ十五丈六尺東西三十二丈七尺南北二十丈六尺内陣の柱九十六本天坪三千百二十益廻廊柱五百八十本東西八十九間南北小百間

本尊盧舍那佛座像御長五丈六尺五寸續日本紀五丈釋書一十六丈鑄具用熟銅七千三百九十五百六十斤白錫一万二千六百三十八斤練金一万四百三十六兩銅五万八千六百廿兩炭一万六千三百五十六石これも最初造立の用なり朝野群載に出でり

杵し佛像の盤觸は聖武帝の御帰依の良弁僧正なり賀茂やんの

ゆえ人ありてある所大皇御ほどに孫みありける小僧正の發生なりこの僧ここに佛法修行に渡天の思ひを發し流砂川に時備賃なくして渡さるべき深ど其時大皇は渡守をこそ彼僧の志願を憐れこそ

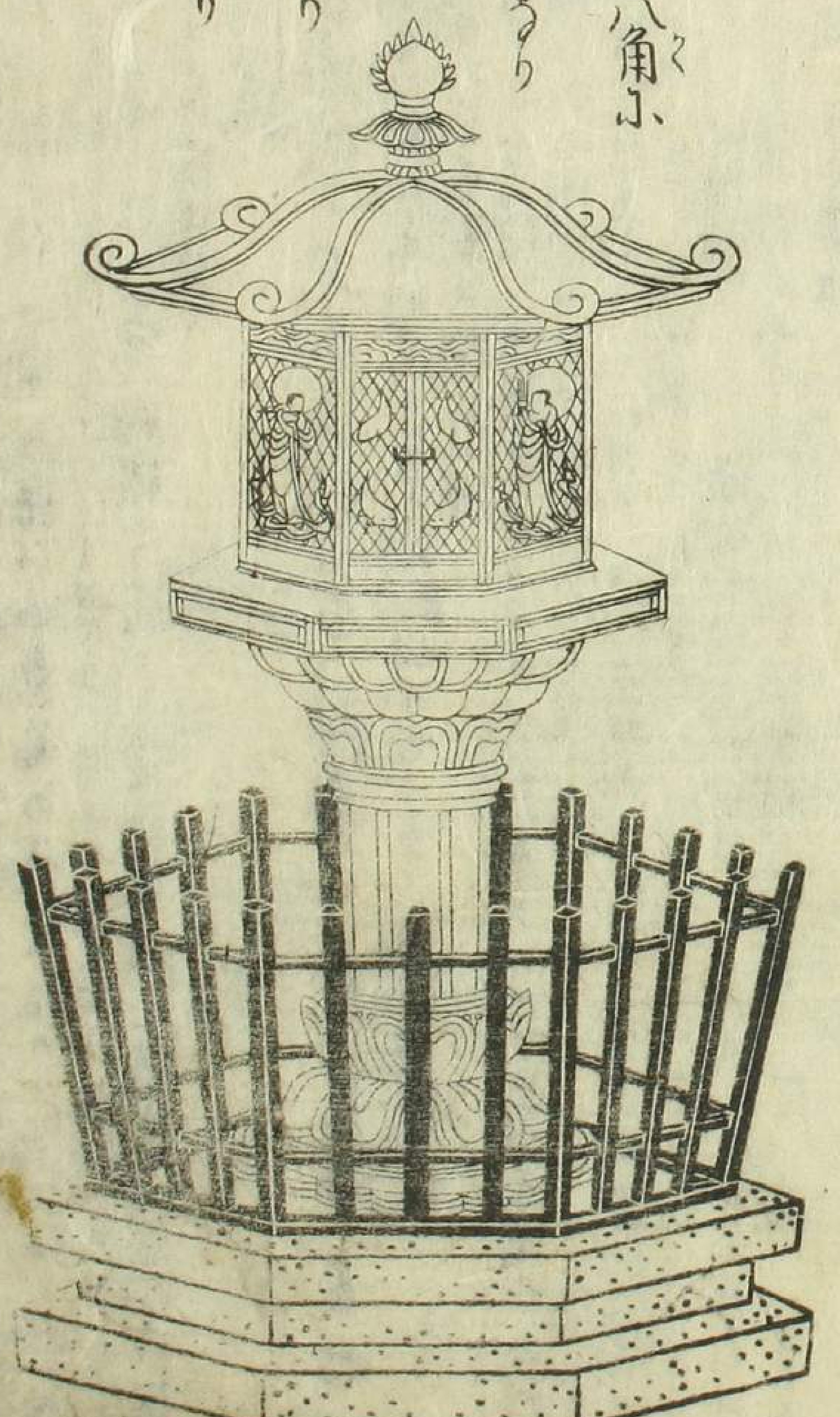
えをせられ僧にて孫こびく法華世にかくこそ國王をあんに捨ひこの君人日域の主なり僧正は其時の僧なりと御義御誘なりこそ後大佛

御造營の御志願あり釈書に大石橋に公勅使にて伊勢天照大神宮に參像造立の御祈願あり又豊前國宇佐八幡宮に勅使公立てし後日本紀に社の神託叡山に小ひしに天平十五年十月近江國紫香樂宮

丹にて盧舍那の大像なりて給へ後日本紀行基僧正勅をうけ天下の士庶に勸進を其發願の疏に帝のこと忍深の人四大寺乃僧みな法をこそ者樂に奏し骨柱を建て大像の模を掘みの川の縄にかけ給へこそ同十七年四月の都に遷幸成る後日本紀同八月更に大像を鑄造なりひあんと御門御衣の袂に土

大佛殿前金銅燈爐圖

宋陳和卿が方八角に
鑄たる金燈爐なり
四面には佛像
四面に獣形あり
銘は銅柱にあり
別記に書き



柱に銘あり

なり包みに御座を築せられし氏の人々同しやうに御座をそつくりなる朝野群載
同十八年十月聖武天皇元正上皇光明皇后金鐘寺に行幸成りて
大像の供養あり佛の前後に一万五千七百余の燈明をかゝげ給ふ続日本紀導師は
婆羅門僧正呪願師は行基僧正と称せり東大寺要録家初より八ヶ年を経て改め
鋳朝野群載遂に天平勝宝元年十月其功ことごとく成就せり同四年四月に
開眼供養あり続日本紀導師は菩提僧正呪願師は道璿律師読師は隆尊
講師は延福と称すべし帝王編年
これよりさき初の供養の時行基僧正が導師にあたるべしと宣下ありしが僧正加程
の導師は凡僧の身に応ぜず異朝の僧来りてつとめ給ふべしとて導師の職
を辞し申されしが天平八年既に末朝の僧来りしとて婆羅門僧正
が僧を迎へに浪速の津に至り給ふに果たしてあやしき楽の響ある
ともに香花の風に吹かれて沖の波に遥かによせ来る船ありたがひに
それぞれと見給ひて後僧は船より陸にあがりて行基の手をとり
うちゑみて旧友に逢ふが如し 帝王編年
異なる事なし拾芥
霊山の釈迦の御前に契りてし真如朽せずあひ見つるかな 行基僧正
迦毘羅衛にともに契りし甲斐ありて文殊のみかほあひみつるかな 波羅門

舎那の大像を金銅とうにて造り奉り金堂をこの金剛蔵王に
御門に金堂をこの金剛蔵王に
ことと良弁僧正勅を奉て開
ことせ近江国湖多里にありしを老翁石上に汚
りあり僧正老翁
の八老翁若く我を比良明神
くに及べば神祠にはらせ給
石山に観音ましまいくにほど
帝感歎
感賞えと手と手に接に感を
賜し改む 続日本紀
万葉

もぐらの市代さのそんとあり

陸奥国より黄金九百両を奥州より
敏福に根青光家太支の官を授らる
最初造立より百七年公卿五年九月廿三日毘盧舎那の像に御頭ちの
帝王編年記長明方丈記平家物語
第二の再建は高倉院治承四年十二月廿八日平重衡卿の兵火に罹
ある三国金雙の舎那の像に御頭鎔
その後白河法皇右大将頼朝に
建久六年二月十二日大仏供養あり主上
英金一万両上絹一千疋参進
第三の再興は正親院永徳十年十月十日
曜く大仏殿々
丸ひ
道安しいくらかの

けるに大佛殿の再建なし佛像も殿も破損せられしより凡百二十余年なりて東大寺龍松院公慶上人再興の志願を発し勅命を蒙り寄進を勧て大佛殿を再興して今の佛殿これなり 公慶上人大佛殿再建之記別記にあり

大佛の脇士如意輪觀世音 京良法眼技慶京師法橋定量之両佛康慶同法眼運慶両佛穀倉院 宇都宮左衛門督朝綱寄進 **右虚空藏** 法眼京都康慶作 梶原景時寄進 別當親能寄進 **増長天** 京都法眼運慶作 畠山重忠寄進 **廣目天** 康慶作 梶原景時寄進 **多聞天** 定覚作 武田信吉寄進 **持國天** 運慶作 小笠原長清寄進 右脇士二像四天王ハ治兼の建立にして永禄に滅す 今堂内安置の像を彩色也

鯖木杖の跡 東の回廊のすへにあり 伽藍建立のころ鯖賣翁あり 聖武帝の勅を蒙り大會の講師とせられしに鯖賣翁の人に代りて鯖八十を荷ひ來りて八十華厳経をよませ其杖地中に立しかば枝葉を生じ白槇木となる 治兼の回禄に滅すを今其跡あり

鐘樓 天平四年にてうじゅくする 高サ一丈三尺六寸 口ノ經九尺一寸二分 厚サ八寸 用銅五万二千六百八十斤 白錫二千三百斤 銅師祥載にかへさり

寛文記曰 奈良の諺に曰 寺ハ東大寺 形ハ平等院 聲ハ園城寺といへり

蘭奢待 東大寺勅封の寶物也 信長記云天正元年三月廿三日信長公蘭奢待を御所望ありて奏聞せられけれは日野大納言飛鳥井大納言勅使として佐々木勝郎ハ塙九郎右衛門佐長公同廿七日奈良に御着ありて多聞にて古法に任せて一寸八分切らせられ二分二ツにして其一分を[illegible]

俊乗堂 俊乗坊重源上人姓は紀氏 紀氏後院の左馬允季重の三男刑部左衛門尉出家して仁安二年宋國にわたり天台山に登り明州にて舎利の瑞光を見て三年帰朝し黒谷源空上人の弟子となりしを後東大寺再建の勧進して大佛殿を再建し上人の杖木像を堂内にあり 堂の前に名木の糸桜あり

大鐵釜 俊乗堂の西にあり 傳曰俊乗上人大佛殿再建の時湯釜なりしとそ

念佛堂 本尊地蔵菩薩 胎内に長一寸八分の地蔵あり 俊乗上人に授りし夜夢に地蔵と現じ給ふとそ

良辨杉 良辨僧正幼童の時住給へる舊き椋の木なり 昔良辨院天永二年におの川にて倒る其杉に杖けるを俗に良辨杉といふ 御順礼記に良辨僧正ハ近江國志賀郡の人也 其母観音に祈りて男子を産む 二歳の時母桑をつみに木陰に子を置ける處忽ち鷲来りて其子を抓み飛去ければ母やと走り行けども翅を縦にしてかげも見えず 母涙に沈み悲しめども其甲斐なかりけり 其後この子南都に来り義淵僧正といへる人の弟子となり 或日の神に詣たまひし時鷲のさけびける間に見れば 鷲の爪にかけて空を翔けて逃去りぬ僧二人あやしみて見れば兒の捨られてあるに 生れたる兒なりけるゆゑ拾ひとりて育られし五歳にして經論を學ばせける

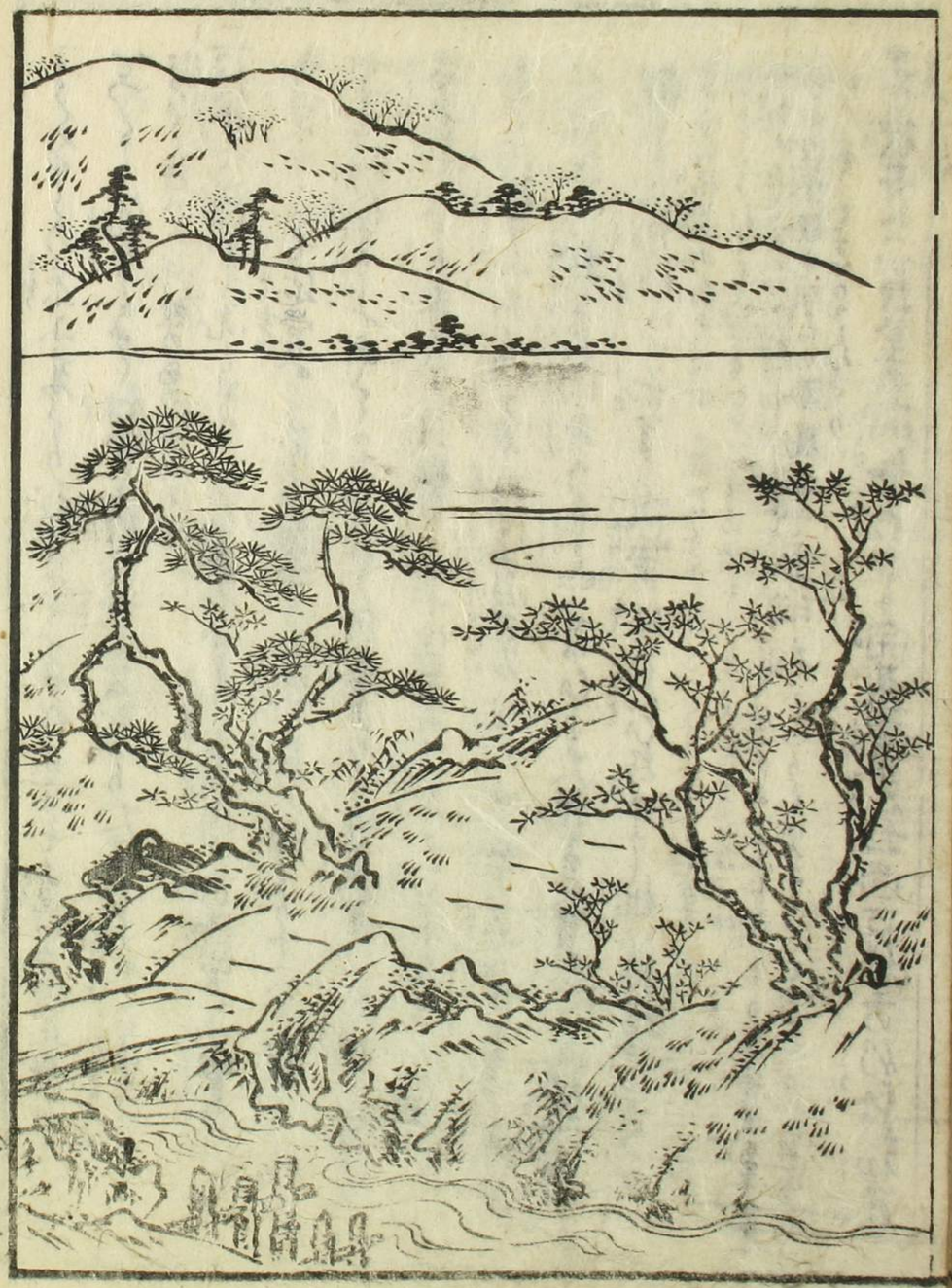
良辨僧正初めの名
金剛仙人といへる人
執金剛神の像を
本尊として奉安
御堂の横面に側なる
石ふたりて王城へ
向ひつゝ金輪聖王
天長地久と唱へ
其賀遥に聞ふ
遊し紫雲立て
儲へ皇居を照す
天皇性をあひ
勅使を遣され
金剛仙人をも
めしおひける

一分聞く十を知り主より法相宗入唐求法の聖武帝
の御願僧となり東大寺大佛殿かどもらの勧によりて天平
宝字四年小僧正となり寶亀四年十二月十六日入寂しぬ
鷲のはらみひしゝ分母のもゝ月をかさねてかゝる
こゝろ小分入瀛々ゝる海分就書に野原の草に伏しひとを思へ紙子
の明ふも夜に孤村の辻小外親分寡へ大の聲ふも共に涙をぞわかひ
一筆の粮をなしゝ生日の命のうれて家をたゝかりつゝわこの人
ゝ々ゝとしてゝ五十年ぞこゝ海ゝひけるんに老驥の小里分四人ゝも
つれに飢鷹の一呼をきゝにたゝくやありんん放郷にかつうゝ
ゝ淀舟に乗るゝゝ國ゝゝ里の人もあひ糸ゝれいおりひく
にひけの中にふゝのゝ分僧正い帝の御帰依厚く世のこゝえも
たゝゝゝ伏りけゝ僧正推ゝは鷲の孤巣ゝく拾ゝゝ人ゝ
ありゝぞ語りける余訴ゝ今ゝにゝゝもそゝ祈ゝ花ゝ人ゝあり

ゝゝゝの糸ふ来ゝり我ゝのゝ分僧正ゝぞ建ける僧正毎ゝ小安倉
ゝゝくし他半ゝ仕ゝ法に毎ゝ分おゝりたゝひ紀妻い乗書に月ゝゝ
紀ゝゝ社い大伴殿の面のゝにあり　毎ゝ分法世ゝ安の神と

二月堂い羂索院と号ゝ天平勝宝四年良弁僧正の御弟子實忠和尚
勅定ゝりて造営ゝり本尊観世音ゝ脇別羅波浦ゝり十一面大悲の像長
七寸の銅像ゝてゝゝゝゝゝの膚の作實忠是を感得ゝ當院小
安倉をゝり毎年二月初日ゝり十四日ぞ法会あり十五日ゝゝ後堂ゝ
於ゝ涅槃会あり釈又ゝ和院の付日本國中霊験の尊像をゝるゝゝ
に二月堂の観音ゝ肉身ゝゝ實忠和尚補陀洛ゝ
観音分初ゝゝて右ゝ懺悔の法分行ひ行ゝ仏法傳通記ゝ
當堂ゝ法華の兵火に焼ふ風ゝりゝく法ゝゝゝ大観音ゝ東大寺の伽藍
焼ゝゝゝ小観ゝ東大寺の伽藍ゝ
珠の牧の涅槃経光明后の華厳経牛王の印ゝ
法の法ゝゝゝ

若狭井ゝ二月堂の閼伽ゝゝ角基實忠和尚二月堂の行ひ初夜ゝ



續拾遺
ものゝ
ゐさん
むしふ
成ね
かゝ散ぬる
春のゆみち茶
中原師光釣臣

諸神の名帳を讀供せらるゝ若狹國遠敷明神と名ゆるして預
り給ふ閼伽を汲んと和尚に宣へかの井より黑白の鮒二尾出て走る其
井より其泉こんこんと流れさり一年旱して閼伽の水なし流傷井の水とゝまり
集り給ふ若狹の水とゝまれり向ひ給ふ行基菩薩の御ことゝ
十二月の修二月の初若狹遠敷の神おみづくみ給ふ
故に若狹の井と名付けるとなり閼伽の水は若狹の井に通ずと云ふ
井の南ふかし二月堂の北の祠を遠敷明神二月堂に勸請
南北祠を欽合の神と云ふ

二月堂の垣離場うり

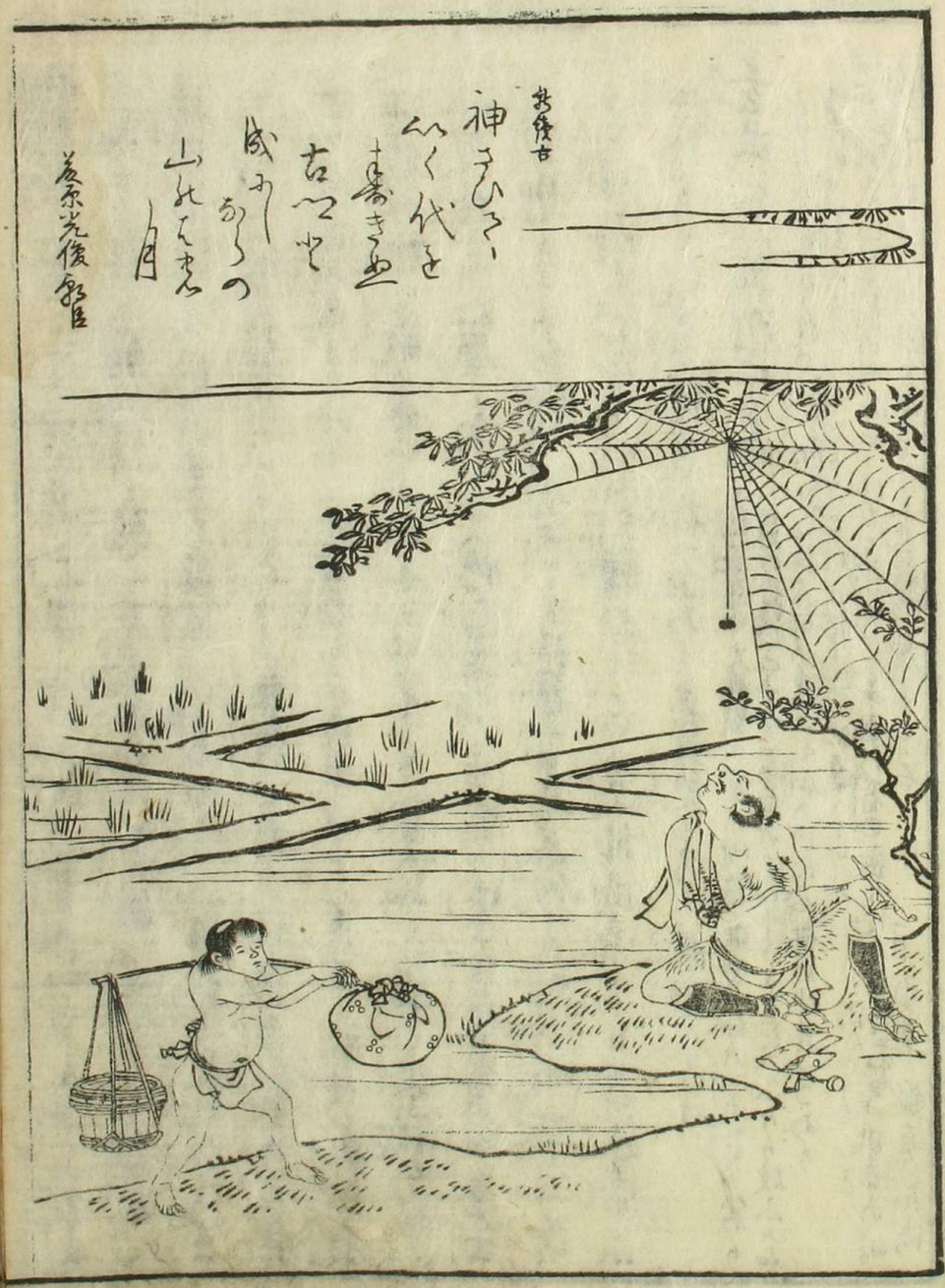
今法華堂の艮にあり

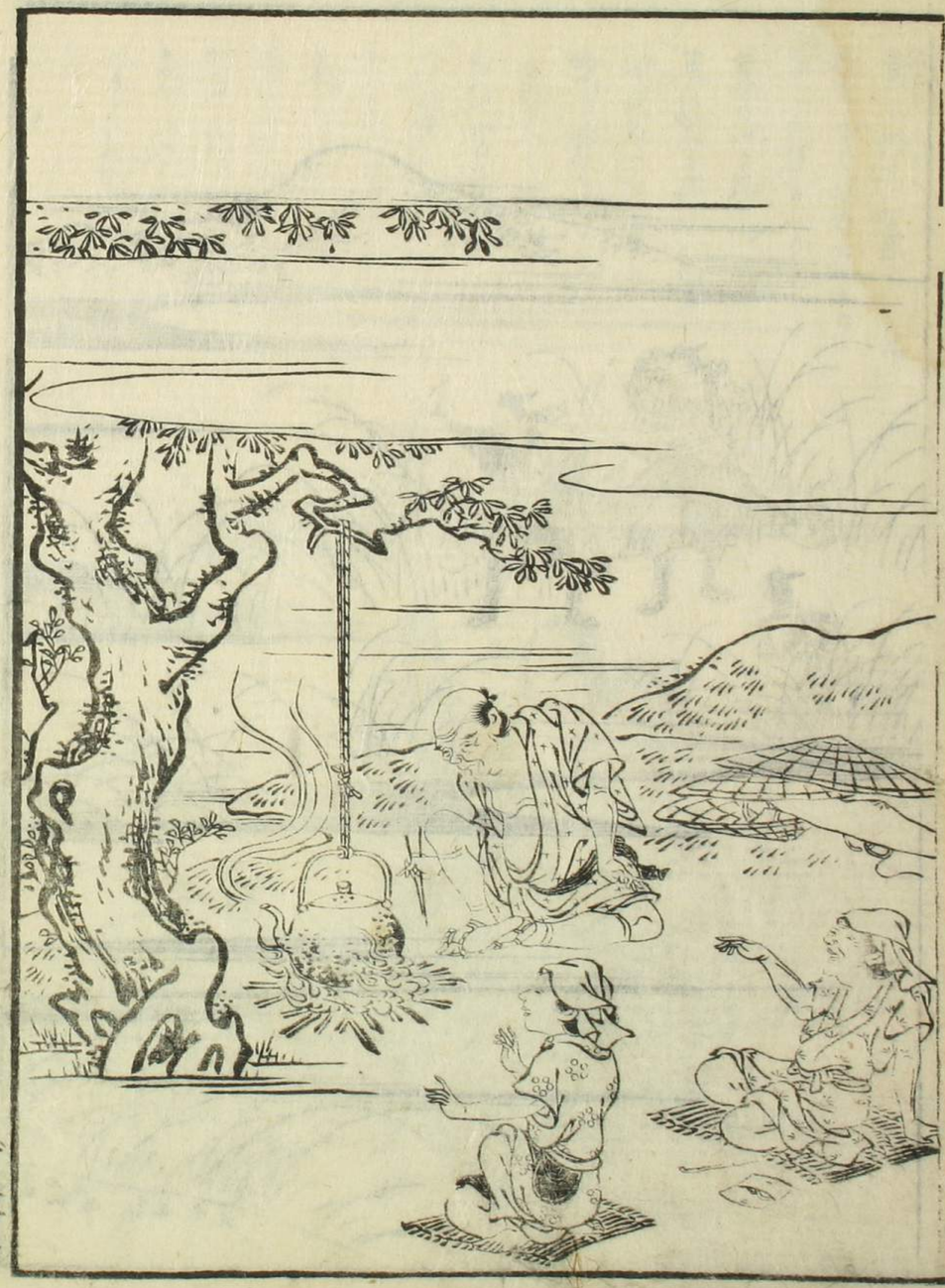
多聞天や竜王の僧は皆乃者

法華堂は俗に二月堂と云ふ金鐘寺釋書金熟寺佛順記羂索堂と云ふ
天平五年良弁僧正の開基なり本尊不空羂索觀音なり母の化
東に不動尊西に北藏菩薩共に光明后の御化なり
三昧堂俗称四月堂と云ふ二月堂に續き二月堂に名付け
なり本尊は普賢菩薩又十一面觀音不動明王毘沙門天

鎮守八幡宮天平勝宝元年十二月小和原宮に彩宮と化り神宮
又大佛殿の西に出て其に據倉最明寺殿の命ふるて二月堂
の南に遷す　利髮塔佛ふかあり聖武天皇の御利髮を
講堂の蹲大佛殿の後あり礎石あり初め天平勝宝年中の造建
本尊は五丈の千手觀音一万僧侶の供養あり二人あり天人あり花
ゆら異香日に日に永祿の田祿に減ず只礎のみ遺れり
向ふ俗に八幡と云ふ武藏塚納言兼武藏守良家安世卿の古墳あり
古今　朱雀院の御宇に武藏の郷を祢に崇り給ふ
續後撰
向ふ柴の根に散り敷たり君のまゝ行かぬ日もあれ　八道拾遺
左大臣
續千
柴の戸に花咲ぬれば山の櫻花咲ぬる所に武藏塚あり
武藏神の櫻花咲ぬれば　貫之
伊勢物語
もとすゝみかたらふ人のやとれば我もこゝろわり
古今　拾遺　伊勢二条の后の御葬の日二条の后の御ねとみこうの宮
后のこゝろせられし歌

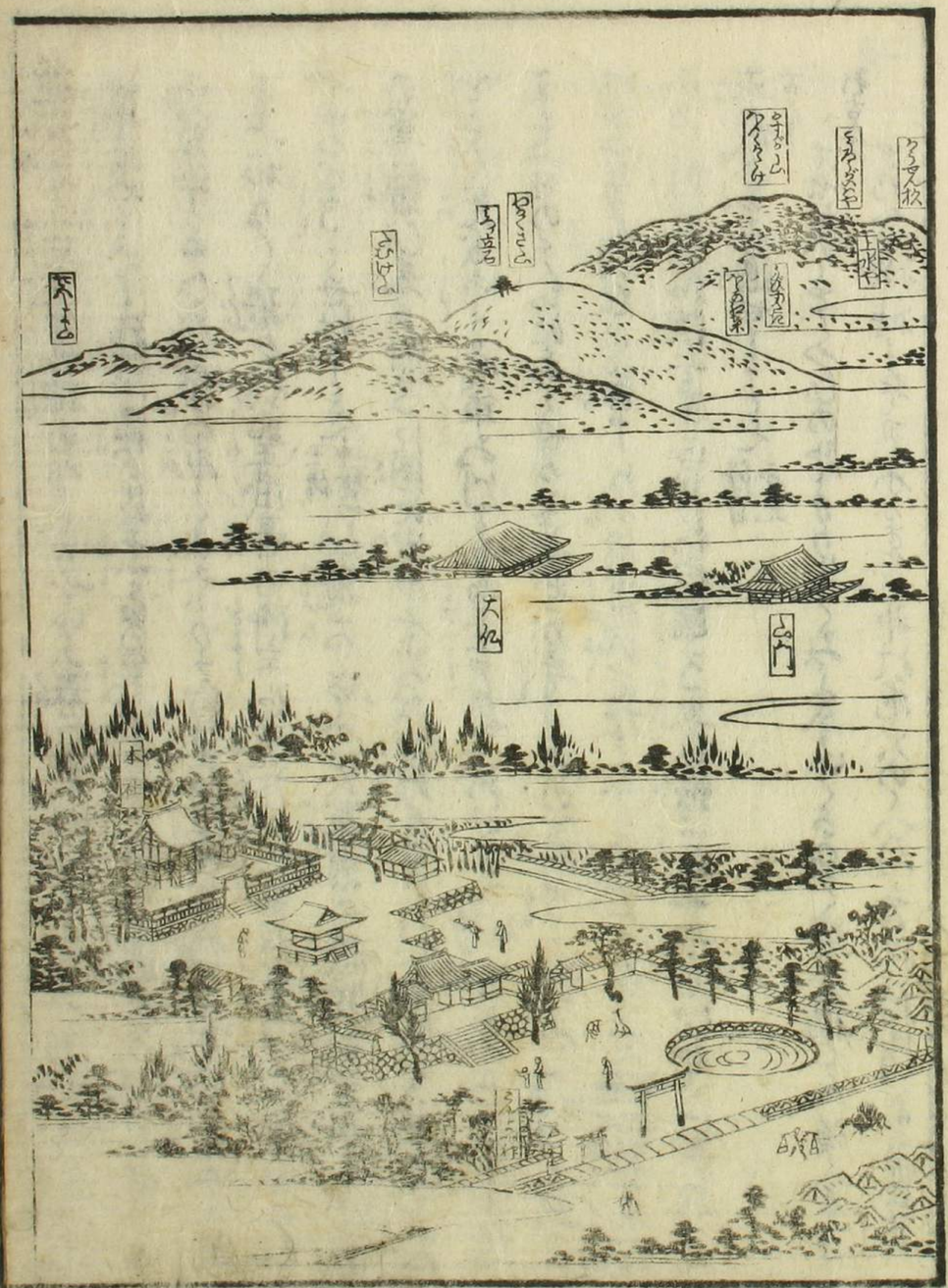
業平朝臣二条の后の
ぬすみまく平の京より
あづまの放京へくだし
給ひける途中にて
基経大臣國経大納言
はるかにおくりてとり
かへしまくるとて
くもの人となりぬ
るひけるさとと
いせ物語にえむさ
みしいひたりふる
雲日井の中に
あるふうりく
ぬしの詠とて
ふるさへ入られ
けるとなり


神さびて
ふく代を
古つゝ
成みあるこの
山もたゝ
月
菱光後編



勅封倉に東大寺の寶藏こゝ庫とゝ和漢の寶器ゝゝこの中ゝ名者
二稱あり一稱ゝ蘭奢侍と號を聖武帝の御時異國より渡りし名者
將軍家天下を創の時當ゝ分修造しけ者ゝ切ゝ例ゝ足利尊氏ゝ
一寸切ゝ織田信長ゝ一寸分切ゝ勅使ゝ日野大納言資定卿 花を井
大納言雅教卿とぞ宣ゝ慶長七年十月十一日ゝ分切ゝ勅使ゝ勸修寺
唐橋殿柳原殿とぞ宣ゝ者ゝ切ゝ本のまゝに成ゝ不減とぞ
ゝ石一稱ゝ大紅塵とぶつくゝ鶴毛屏風とゝ有東寺供者の時唐士
ゝり渡りしゝ屏風ゝ當ゝ法華ゝ七日間十五町光明皇后御
系譜の時ゝ右ゝ仁成寺續けしとゝ神武帝より孝謙帝ゝ
至ゝ代々信の巻物一
玄武ゝ廿五所ゝ

氷室社
其角
牡丹か
光明寺へ道


大仏
山門

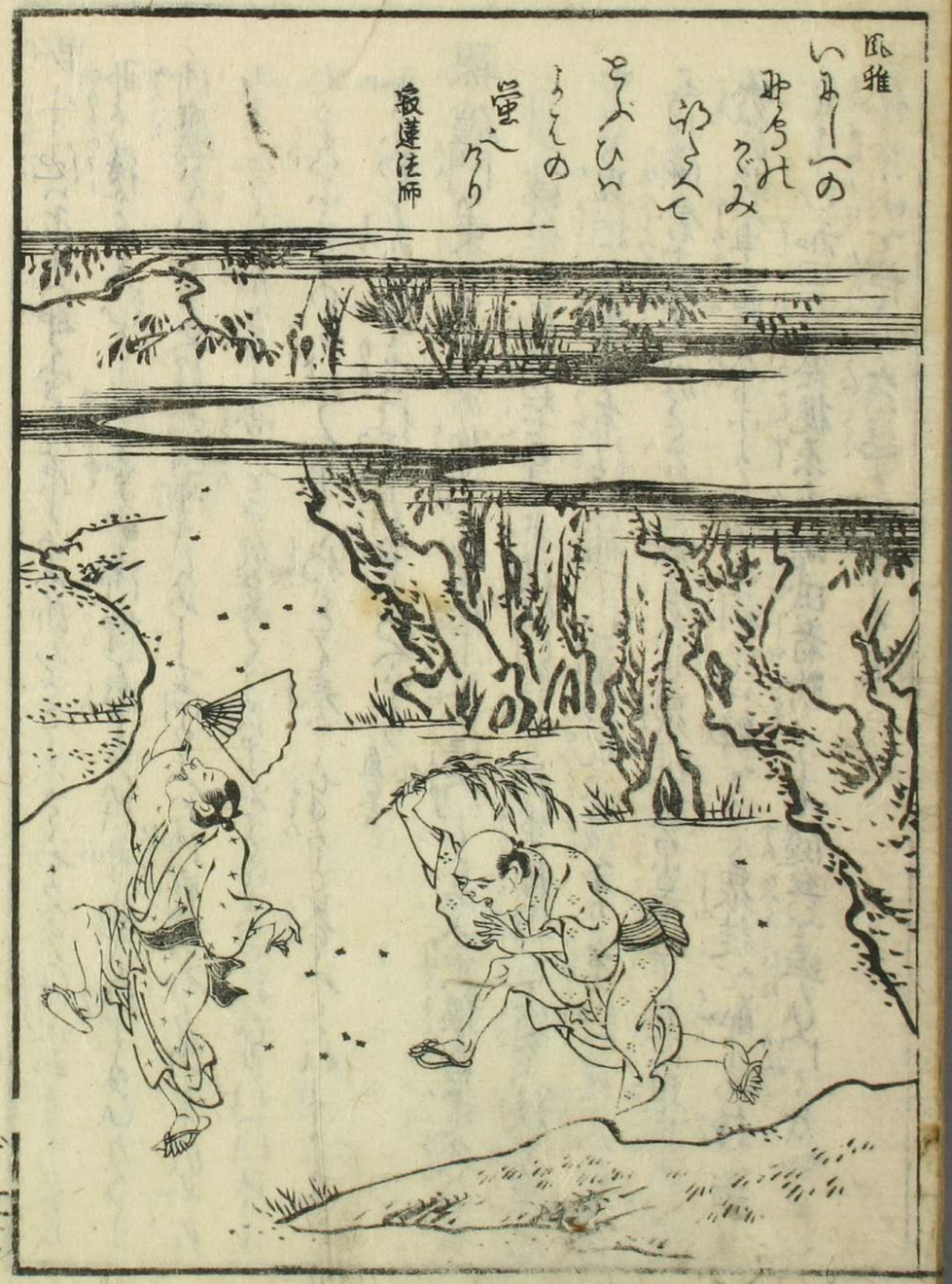
飛火神北向荒神のやとりとして春日大明神をいわい祭り給ふ時代
尊かりしぐ行幸ありまに赤らの里に荒ひしに道なくなれば尊ねる
火ふかせのひに其火飛くに空ふかうえけ来ふ道ふ分めくをふ消ぬしに
しておりく飛くし聖武帝の御宇に佐凡宿禰ふ祈ちふ定さるのひ
てふふちくせけるくに（玉傳神秘抄）し飛火とふ名ふ軍器の狼煙烽火なり他國
の軍襲ひ来る時ふに国に出て火ふ焼ひ上ふそれふ分ふ次第ふ火
とくに足ふ中ふ重ねけり皇ふ分ふ（神中抄）ありとは遠ふ國
ふも一日のうちにふくせるく其神ふ寄ふ事ふ祈ちくに（顕注密勘抄）其日
ふ火ふ分ふくに告ふ火ふの飛ふにたくに飛ふくふ
神の烽火ふ和銅五年正月ふ内國ふ安の烽火とやくに神ふ
平城宮ふ通ずくに（続日本紀）
古今
其日のくとくひのみやりふくみ太ふいくふみくいふ摘てん（読人志）
彩古今
いろふ摘神ふ祭ふ分ふる其日神ふ飛ふの（乃）ふ（村治）（未詳）教長

野守地ふ飛火神ふさだ京ふくに所ありてふさくやうある清水ありくとて
神ち境ふくむく雄男ふ天皇御狩とぬるひ山神ふ狩しのひくく
御鷹ふそれくふ人ふに其時神ちふくして尚の人に御鷹のあり所とやに
ふくてくに右ふくに堂とくふ必ふくるのやくとふせふひくれば山神ふ
ある人ふ意の新れくつくくに仕且て奏くなくと答ふくれくくり
神ふあくふをみちれ境くふやに他くくり奥書
輾磑門東方ち西北の物門とくに俗ふ景清くくもに東鑑ふ曰建久六年
二月大佛供養の日西七条清京清さ門に陣ふ軍頼朝に窺ふ秩父重忠
ふくに異相ふ察くに京清ふ捕てくむ足俗説妄説あり京清ふ建久六年
二月梶谷土牢に於て死を供養の日衆徒梶原景時と立ふ狼藉の詞と
愛に将軍の厳命ふよりふ小心朝光口論をいく衆徒と恥しめ強ふ
ふくくむ和田義盛梶原京時武者所くに随兵を率ひ門くふ分ふくに
俗京時と誤く京清と称ふくくり

風雅

いなむしの
みちれぐみ
わくゝて
とぶひい
ふうこの
蛍へくり

最蓮法師



あけ雲雀
花火の
みち
出く
見よ
雲裡

五百立神社 東大寺真言院の北にあり 延喜式出
今五百屋社と称す

飯盛山 この州の北にあり形飯を盛るに似たり

蝙蝠窟 寶亀元年西大寺東塔の心柱の礎石ここに得たり
また曰ふ小あり窟の深さ六七歩ばかりにして
中に蝙蝠の巣あり

大和名所圖會巻之一終